

重右衛門の最後

田山花袋

青空文庫

五六人集つたある席上で、何ういふ拍子か、ふと、魯西亞ロシヤの小説家イ、エス、ツルゲネーフの作品に話に移つて、ルウヂンの末路や、バザロフの性格などに、いろ／＼興味の多い批評が出た事があつたが、其時なにがしといふ男が急に席を進めて、「ツルゲネーフで思ひ出したが、僕は一度獵夫れふしゆき手記の中にでもありさうな人物に田舎ゐなかで邂逅でつくはして、非常に心を動かした事があつた。それは本当に、我々がツルゲネーフの作品に見る魯西亞の農夫そのまま、自然の力と自然の姿とをあの位明かに見たことは、僕の貧し

い経験には殆ど絶無ほとんと言つて好い。よく観察すれば、日本にも随分アントニイ、コルソフや、ニチルトツフ、ハーノブのやうな人間はあるのだ」と言つて話し出した。

二

まずつと初めから話さう。自分が十六の時始めて東京に遊学に来た頃の事だから、もう余程古い話だが、其頃かうぢまち麴町ドイッの中六番町に速成学館といふ小さな私立学校があつた。英学、独逸学、数学、漢学、国学、何でも御座れの荒物屋で、重おもに陸軍士官学校、幼年学校の試験応募者のために必須の課目を授けるといふ、今で

も好く神田、本郷辺へんの中なか通どほりに見るまことにつまらぬ学校で、自分等が知つてから二年ばかり経たつて、其学校は潰つぶれて了しまひ、跡には大審院の判事か何かが、その家を大修繕して、裕ゆたかに生活して居るのを見た。けれど其古風な門は依然たる昔の儘まで、自分は小倉こくらの古袴ふるばかまの短いのを着、肩いを怒からして、得々とくとして其門に入つて行つたと思ふと、言ふに言はれぬ懐なつかしい心地がして、其時分のことが簇むら々と思ひ出されるのが例つねだ。で、何どうして自分が其学校に通ふ事に為なつたかと言ふと、夫それは自分が陸軍志願であつたからで自分の兄は非常な不平家の処から、規則正しい学校などに入つて、二年も三年も懸かつて修業するのなら誰にでも出来る、貴様は少くともそんな意気地の無い真似しを為してはならぬ。何でも

早く勉強して、来年にも幼年学校に入るやうにしなければ、一体男児の本分が立ぬではないか。と言つた風に油を懸けられたので、それで当時規則正しい、陸軍志願の学生には唯一の良校と言はれた市谷の成城学校にも入らずに、態々速成といふ名に惚れて、そのつまらぬ学校の生徒と為つたのであつた。今から思ふと、随分愚かな話ではあるが、自分はいくらか兄の東洋豪傑流の不平に感化されて居つたから、それを好い事と深く信じ、来年は必ず幼年学校に入らなければならぬと頻りに学問を励んで居た。

忘れもせぬ、自分の其学校に行つて、頬に痣のある数学の教師に代数の初歩を学び始めて、まだ幾日も経ぬ頃に、新に入学して来た二人の学生があつた。一人は髪の毛の長い、色の白い、薄

痘痕ぼたのある、背の高い男で、風采は何所どことなく田舎臭あなかくさいとこ
 ろがあるが、其の柔和な眼色めつきの中うちには何所どことなく人を引付ける不
 思議の力が籠こもつて居て、一見して、僕は少なからず氣に入つた。
 一人はそれとは正反対に、背の低い、色の浅黒い瘦やせこけた体格で、
 其顔には極ごくく単純な思想が頭あははれて居るばかり、低頭勝うつむきがちなる眼
 には如何いかなる空想の影をも宿して居るやうには受取れなかつた。
 二人とも綿めんの交つた黒の毛糸の無意気ぶいきな襟えりまき巻を首に巻付けて、
 旧ふるい旧い流行後れの黒の中高帽を冠つて（学生で中高帽などを冠
 つて居るものは今でも少い）それで、傍そばで聞いては、何とも了解わか
 らぬやうな太はなはだ甚だしい田舎訛あなかなまりで、互に何事をか声高く語り合ふ
 ので、他の学生等はいづれも腹を抱へて笑はぬものは無い。

「イツト、エズ、エ、デツク」

とナシヨナルの読本の発音が何うしても満足に出来ぬので、二人はしたゝか苦しんで居たが、ある日、教師から指名されて、「ズー、ケツト、ラン」と読方を初めると……、生徒は一同どつと笑つた。

漢学の素読の仕方がまた非常に可笑しかつた、文章軌範の韓退之の宰相に上るの書を其時分我々は読んで居つたが、それを一種可笑しい、調子を附けずには何うしても読めぬので、それが始まるといつも教場を賑はすの種とならぬ事は無かつたのである。

ある日、自分が課業を終つて、あたふたとその学校の門を出て

行くと、自分より先にその田舎の二人が丸で兄弟でもあるかの様に、肩と肩とを摩すり合あせて、頻しきりに何事をか話しながら歩いて行く。

声を懸けようと思つたけれど、黙つて自分は先へ行つて了しまつた。次の日も二人睦むつましさうに並んで行く。

矢張声を懸けなかつた。

次の日も……

又其次の日も矢張同じやうに肩を摩り合せて、同じやうにさも睦しさうに話し合つて行くので、彼等は一体何所どこに行くのか知らん、自分等の帰る方角に帰つて行くのか知らんと思ひながら、ふと、

「君達は何処どこです」

と突然尋ねた。

急に答は為せずに丁寧ていねいに会釈えしやくしてから、

「私等わしらあですか、私等は四谷よつやの塩町しほちやうに居るんですがア」

と背の高い方がおづく答へた。

「僕も四谷の方に行くんだ！」

と自分も言つた。其頃自分は牛込とみひさちやうの富久町とみひさちやうに住んで居たの

で、其処そこに帰るには是非四谷の塩町は通らなければならぬ。否、

四谷の大通よつやには夜などよく散歩でかくに出懸る事がある身の、塩町附近

の光景ひとかたには一方ひとかたならず熟して居る。玩弄屋おもちややの隣かぢやに可愛い娘の

居る砂糖屋、その向ふに松風亭といふ菓子屋、鍛冶屋かぢや、酒屋、其

前に新築の立派な郵便電信局……。

二三歩歩いてから、

「塩町つて、……僕はよく知ってるが、塩町の何処です、君達の居る家は……」

「塩町の……湯屋の二階に来て居るんでさア」

「湯屋つて言へば、あの角に柳のある？」

「左様でがさア」

「それぢや僕も入つた事がある湯屋だ。彼処あそこには背の低い、ここ

くした妻君が居る筈はずだ」

「好く知つて居やすナア」

と驚いた様子。

「それぢや、いつでも僕が帰る道だから、これから一所に帰らうぢやありませんか」

「さう願へりや、はア結構だす……」

と背の低い方が答へた。

又二三歩黙つて歩いた。

「それで君達の国は一体何処です？」

「私等の国ですか、私等の国は信州でがすが……」

「信州の何処どこ？」

「信州は長野の在でがすア」

「何時いつ東京こつちに来たのです」

「去年の十二月、来たんですが、

山やま中んなかから、はア出て来たも

「んで、為え体が分らないでえら困りやした」

「塩町の湯屋は親類ですか」

「親類ぢやありやしねえが、村の者で、昔村で貧乏した時分、私等の親が大層世話をした事がある男でさア。十年前に国元ア夜逃げする様にして逃げて来たゞが、今ぢやえら身代しんだいのう拵こしらへて、彼地処あすこでア、まア好い方だつて言ふたが、人の運て言ふものは解らねえものだす」

自分はこの時からこの二人に親しく為なつたので、段々話を為して見ると、言ふに言はれぬ性質の好い処があつて、背の高い方は田舎者に似合はぬ才をも有もつて居るし、又背の低い方は自分と同じく漢詩を作る事を知つて居るので、一月もその同じ道を伴立つれだつて

帰る中うちには、十年も交つた親友のやうに親しくなつて、互の将来の思想も語り合へば、互の将来の目的も語り合つて、時間の都合で一所に帰られぬ時は非常に寂さびしく感ずるといふ程の交情になつて了つた。自分は四谷御門の塵埃ほこりの間を歩きながら、幾度二人に向つて、陸軍志願を勧めたであらうか。幾度二人に漢学の修養の必要を説いたであらうか。自分は其頃兄に教はつて居た白文はくぶんの八家文はつかぶんの難解の処を読み下し、又は即席に七絶ぜつを賦ふして、大いに二人を驚かした。ことに背の低い山やま県行三郎がたかうざぶらうといふのは、自分の漢詩たぐみに巧たくみであることを知つて、喜んでその自作の漢詩を示し、好くその故郷ふるさとの雪の景色を説明して自分に聞かせた。自分の若い空想に富んだ心は何どんなにその二人の故郷の雪景色なるも

のを想像したであらうか。二人は言ふのである。自分の故郷は長野から五里、山又山の奥で其の景色の美しさは、とても都会の人の想像などでは解りこは無えだアと。否、そればかりではない、背の低い山県は学問の時間の間に、その古い手帳をひろげて、其処に描かれたる拙つたない一枚の写生図を示し、これが私の家、これが杉山君の家、こゝにこんもりと茂つて居るのは村の鎮守、それから少し右に寄つて同じ木立こだちのあるのは安養寺といふ村の寺、私等の逃げて来たのは（かれ等は親の許さぬのに、青雲せいうんこゝろざしの志に堪へかねて脱走して来たのである）十二月の十三日の夜で、地上には雪が四五尺も積つて、その堅く氷つてる上に、月が寒く美しく照り渡つて、何とも言へない光景だつた。私は杉山君と昼間約束

して置いたから、鎮守の向ふに行つて待つて居ると、やがて杉山君は遣つて来る。二人連れ立つて歩み出す。追手のかゝらぬやうに為るには何でも夜の中に長野に行つて、明日の一番の汽車に乗らなければならぬ。と言ふので、一生懸命に歩いたが、村が見えなくなつた時は流石さすがに胸が少し迫つて、親達は嘸驚おどく事であらう。こんな無理な事を為しないでも、打明けて頼んだなら、公然東京に出して呉れるであらうと思つた……などといふ事を自分に話した。自分はいよく空想たくましを逞たくまうして、其村、その静かな山の中の村に一度は是非行つて見度いと、其頃から自分の胸はその山中の一村落なみうちに向つて波打つゝあつたので……。猶なほ詳しく聞くと、その村には尾谷川をたにがはといふ清い溪流けいりうもあるといふ。その岸には水車が

幾個となく懸つて居て、春は躑躅つじじ、夏は卯の花、秋は薄すくきとその風情ぜいに富んで居ることは画にも見ぬところである相さうな。又その村の山の畠には一面雪ならぬ蕎麦そばの花が咲き揃そろつて、秋風のさびしく其上を吹き渡る具合など君でも行つたなら、何んなに立派な詩が出来るか知れぬとの事。あゝ本当にその仙境はどんな処であらうか。山と山とが重り合つて、其処に清い水が流れて、朴ぼくとつ訥な人間すきが鋤なを荷つて夕日の影にてくく〜と家路をさして帰つてゆく光景。それを想像すると、空想は空想に枝葉を添へて、何だか自分の眼の前には西洋リーダーの読本の中の仙フェアリー女の故郷がちらついて何うも為ならぬ。

三

二人の寄寓して居る塩町の湯屋の二階、其処に間もなく自分
 行くやうになつた、二階は十二畳敷二間で、階段を上つたところ
 の一間の右の一隅には、櫂の眩々した長火鉢が据ゑられてあ
 つて、鉄の五徳に南部の錆びた鉄瓶が二箇懸つて、その後にし
 つかりした錠前の附いた総桐の箆笥がさも物々しく置かれ
 てある。総じて室の一体の裝飾が、極く野暮な商人らしい好み
 で、その火鉢の前にはいつもでつぷりと肥つた、大きい頭の、痘
 痕面の、大縞の襦袢を着た五十ばかりの中老漢が跣坐をか
 いて坐つて居るので、それが又自分が訪ねると、いつも笑ひなが

ら丁寧えしやくに会やく釈すを為るのが常であつた。この主人公すなはが即ち二人の山の中から出身した昔の無頼漢ぶらいかんなるもので、二十年前には村の中にも其五尺の身を置く事が出来なかつたのであるが、人間の運しといふものは解らぬ者で、二十九歳の時に夜逃しを為て、この東京に遣やつて来て、蕎麦屋の坦夫かつぎ、質屋の手伝、湯屋の三助とそれからそれへと辛抱して、今では兎とに角かく一軒の湯屋の主人と成り済すまして、財産の二三千も出来たといふ、まア感心すべき部類に入れても差支ない人間であつた。であるから自分の村の者と言へば、随分一肌抜いで、力にもなつて遣るので、その山の中から来た失意の人間は、多くはこれを便たよつて来て、三助から段々湯屋の主人に立身しようとして居る人間も随分あるといふ事だ。全体信濃しなののそ

の二人の故郷といふのは、越後えちごの方に其境を接して居るから、出で稼かせぎといふ一種の冒険心には此上もなく富んで居るので、また現在その冒険に成功して、錦を故郷に飾つた例ためしはいくらも眼の前に転ころがつて居るから、志を故郷に得ぬものや、貧窶ひんるの境きやうに沈淪ちんりんして何どうにも彼かうにもならぬ者や、自暴自棄に陥つた者や、乃至ないしは青雲の志の烈しいものなどは、恰あたかも溪流だいの大海かいに向つて流れ出づるが如く、日夜都会に向つて身を投ずるのを躊躇ちうちよしないのであつた。あゝこの山中の民の冒険心。

で、自分は愈いよくその山中の二人の青年と親しくなつて、果ては殆ほとんど毎日のやうにその二階を訪問した。春はやゝ過ぎて、夕の散歩の好時節になると、自分はよく四谷の大通を散歩して、帰りには

必ずその柳のある湯屋に寄つてみる。すると、二階の上から田舎の太神樂だいかぐらに合せる横笛の声がれるろ、ひーひやらりと面白く聞えて、月がその物干台の上に水の如く照り渡つて、その背の低い山県の姿が、明かな夜の色の中に黒くくつきりと際立きはだつて見える。

「おい、山県君！」

と下から声を懸ける。

と……笛の音がねばつたり止む。

「誰だか」

と続いて田舎訛あなかなまりの声。

「僕、僕、とみやま富山！」

「富山君か、上あがんなはれ」

その物干台！ その月の照り渡つた物干台の上で、自分等は何んなにその美しい夜を語り合つたであらうか。今頃は私等の故郷でもあの月が三みつみね峯の上に出て、鎮守やしろうの社の広場には、若い男や若い女がその光を浴びながら何の彼かのと言つて遊び戯れて居るであらう。斑まだらをさん尾山の影が黒くなつて、村の家々より漏るゝ微かな燈ともしび火の光！ あゝ帰りたい、帰りたいと山県は懐郷の情に堪へないやうに幾度もいふ。自分も何んなにその静かな山中の村を想像したであらうか。

半年程立つた頃、自分は又その同じ村の青年の脱走者を二人から紹介された。顔の丸い、髪ひたひの前額おほを蔽つた二十一二の青年で、

これは村でも有数の富豪の息子であるといふ事であつた。けれど自分は杉山からその新脱走者の家の経歴を聞いたばかり、別段二人ほど懇意にはならなかつた。杉山の言ふ所によると、その根本ねもと（青年の名は根本行かうすけ輔と言ふので）の家柄は村では左程重きを置かれて居ないので、今でこそ村第一の富豪かねもちなどと威張つて居るが、親父の代までは人が碌ろく々交際しも為ない程の貧しい身分で、その親父は現に村の鎮守の賽さい銭せんを盗んだ事があつて、その二十七八の頃には三之助（親父の名）は村の為めに不利な事ばかり企らんでならぬ故こいつそ筵こもに巻いて千曲川ちくまがはに流して了はうではないかと故老の間に相談されたほどの悪漢であつたといふ事である。それがあつた時、其頃の村の俄にはかぶんげん分限の山田といふ老人に、貴様

も好い年齢としをして、いつまで村の衆に厄介を懸けて居るといふ事もあるまい。もう貴様も到底たうてい村では一旗挙げる事は難しい身分だから、一つ奮発して、江戸へ行つて皆の衆を見返つて遣らうといふ気は無いか。私わしなどを見なされ、一度は随分村の衆に馬鹿にされて、口惜しい〜と思つたが、今では何うやらかういふ身になつて、人にも立てられる様になつた。三之助、貴様は本当に一つ奮発して見る気は無いか。と懇々説諭されて、鬼の眼に涙を拭きき、餞せんべつ別に貰つた金を路銀ろぎんにして、それで江戸へ出て来たが、二十年の間に、何う転んで、何う起きたか、五千といふ金を攫つかんで帰つて来て、田地を買ふ、養蚕やうさんを為る、金貸を始める、瞬またゝく間に一万の富豪しんだい！ だから、村では根本の家をあまり好くは

言はぬので、その賽銭箱の切取つた処には今でも根本三之助窃盗と小さく書いてあつて、金を二百円出すから、何うかそれを造り更へて呉れると頼んでも、村の故老は断乎だんことしてそれに応じようともせぬとの事である。その長男がまた新しい青雲を望んで、ひそかに国を脱走するといふのは……何と面白い話では無いか。

けれど自分がこの三人と交際したのは纔わづか二年に過ぎなかつた。山県は家が余り富んで居ない為め、学資が続かないで失望して歸つて了ふし、根本は家から迎ひの者が来て無理往生に連れて行つて了ふし、唯一人杉山ばかり自分と一緒に其志を固く執とつて、翌年の四月陸軍幼年学校の試験に応じたが自分は体格で不合格、杉山は亦また学科で失敗して、それからといふものは自分等の間にもい

つか交通が疎うとくなり、遂つひには全く手紙の交際になつて了つた。杉山は猶暫なほく東京に滞とゞまつて居た様子であつたが、耳にするその近状はいづれも面白からぬ事ばかりで、やれ吉原よしはらがよひ通だまを始めたの、筆屋の娘を何うかしたの、日本授産館の山師に騙だまされて財産を半分失なくしたのと全く自暴自棄に陥つたやうな話であつた。それから一年程経つて失敗に失敗を重ねて、茫然ぼんやり田舎に帰つて行つた相だが、間もなく徴兵の鬪くじが当つて高崎の兵營に入つたといふ噂うはさを聞いた。

四

五年は夢の如く過ぎ去つた。

其の五年目の夏のある静かな日の事であつた。自分は小山から小山の間へと縫ふやうに通じて居る路を喘ぎくく伝つて行くので、前には僧侶の趺坐したやうな山が藍を溶したやうな空に巍然として聳えて居て、小山を開墾した畑には蕎麦の花がもうそろそろその白い美しい光景を呈し始めようとして居た。空気は此上も無く澄んで、四面の山の涼しい風が何処から吹いて来るとも無く、自分の汗になつた肌を折々襲つて行くその心地好きさ！これは山でなければ得られぬ賜と、自分はそれを真袖に受けて、思ふさま山の清い※気を吸つた。十年都会の塵にまみれて、些の清い空気をだに得ることの出来なかつた自分は、長野の先の牟礼の停車場で

下りた時、その下を流るゝ鳥居川の清溪と四辺あたりを囲む青山の姿とに、既に一方ひとかたならず心を奪はれて、世にもかゝる自然の風景もあることかと坐そろに心を動かしたのであるが、溪橋を渡り、山嶺いをめぐり、進めば進むほど、行けば行くだけ、自然の大景は丁度ちやうど尽きざる絵巻物を広げるが如く、自分の眼前に現はれて来るので、自分は益々興を感じて、成程これでは友が誇つたのも無理ではないと心しんから思つた。

小山と小山との間に一道の溪流けいりう、それを渡り終つて、猶其前に聳えて居る小さい嶺みねを登つて行くと、段々四面あたりの眺望てうぼうがひろくなつて、今迄越えて来た山と山との間の路が地図でも見るやうはつきりに分明指點せらるゝと共に、この小嶺せうれいに塞ふさがれて見得なかつ

た前面の風景も、俄かにパノラマにでも向つたやうにはつと自分の眼前に広げられた。

上州境の連山が丁度屏風を立廻したやうに一帶に連り渡つて、それが藍でも無ければ紫でも無い一種の色に彩られて、ふはくとした羊の毛のやうな白い雲が其絶巔からいくらかも離れぬあたりに極めて美しく靡いて居る工合、何とも言へぬ。そして自分のすぐ前の山の、又その向ふの山を越えて、遙かに帯を曳いたやうな銀の色のきらめき、あれは恐らく千曲の流れで、その又向ふに続々と黒い人家の見えるのは、大方中野の町であらう。と思つて、ふと少し右に眼を移すと、千曲川の沿岸とも覺しきあたりに、絶大なる奇山の姿！

何と言ふ山か知らん……と自分は少時しばらくその好景に見惚みとれて居た。

ふと背負籠しよひかごを負つた中老漢ちゆうおやぢが向ふから上のぼつて来たので、

「あの山は？」

ゆびさと指して尋ねた。

「あれでがすか、あれははア、飯山いひやまの向ふの高社山かうしやざんと申しやすだア」

あれが高社山！ よく友の口から聞いたと思ふと、其時の事がむらく簇々と思ひ出されて今更其頃が懐なつかしい。其頃は其仙境を何時いつ尋ねて行かれるであらうか、或は一生尋ねて行く事が出来ぬかも知れぬなどと思つて居たが、五年後の今日かうして尋ねて行くと

は、如何に縁の深い事であらう。

「塩山村しほやまむらへはまだ余程あるかね」

「塩山へかね」と背負籠しよひかごを傍かたはらの石の上に下して、腰を伸しなが

ら、「塩山へは此処からまだ二里と言ひやすだ。あの向ふの大でか

山の下こまかにいくつ小さい山が幾箇となく御座らつせう。その山やまんなか中だアに

……」

「塩山に根本といふ家はあるかね」

と自分は更に尋ねた。

「根本……御座らしやるとも、根本ていのア、塩山では一等の

丸持まるもち大尽だいじんでござすア」と答へて、更に、「で貴郎あんたア、根本さ

ア処とけの御客様おきやくさんかね」

「其処かうすけに行輔むすこといふ子息が有るだらう？」

「御座らつしやる」と言つて吸ひ懸けた烟草たばこの烟けむりを不細工な獅子

鼻からすうと出し、「大尽どこの子息に似合ねえ堅い子息でござすア、何でも東京へ行かした時にア、それでも四五百も遣つたといふ噂だが、それから堅くなつて、今ぢや村でも評判ものでござす」

「一体おまへ汝は何処だね？ 塩山かね」

「いんにや、塩山ではごへん、その一つ前の村の倉沢でござす」

「もう根本は女房かみさんを持つたらう」

「鼻かさまでござすか、持ちましたとも、……えいと……あれは確

か三年前で、芋子村いもこむらの大尽の娘さアだ」

「子供は？」

「まだごわしねえ、もう出来さうな者だつて此間も父様えらく心配しんぱいのう為で御座らしやつたけ」

「それでは山県といふのも知つてるだらう」

「山県——はア学校の先生様せんせいだア、私等が餓兒がきも先生様の御蔭にはえらくなつてるだア。好えい優しい人で、はア」

「それでは杉山は何うしてるね」

「えらく、貴郎ア、塩山の人の名前知つて御座らつしやるだア。

貴郎ア、若い者等が東京に出た時懇意なに為すつて居た先生だかね……」

言懸けてじろくと自分の顔を見て、

「……杉山の子息……あれア、今は徴集されて戦争（日清戦争）
 に行つてるだ。あの山師にや、村ではもう徴々して居るだア。
 長野に興業館といふ東京の山師の出店見ていなものを押立てて、
 薬材で染物のう御始めるつて言つて、何も知らねえ村の者を騙
 くらかして、何でもはア五六千円も集めただア。それを皆な妾を
 置いたり、芸妓を家に引摺込んだり、遊廓に毎晩のやうに行
 つたり、二月ばかりの中に滅茶くにして仕舞つたダア。……恐
 ろしい虚言家でナ、私等も既の事欺騙かされる処でござした」
 「家は今何うしてるね」

「家でごすか、余程あれの為に金のう打遣つたでがすが爺
 様まだ確乎して御座らつしやるし、廿年前までは村一番の大

尽だつたで、まだえらく落魄おちぶれねえで暮して御座るだ」

と言つたが、ふと思出した様に、

「塩山つていふ村は、昔からえらく変り者を出す所でナア、それが為めに身代しんだいを拵こしらへる者は無えではねいだが、困つた人間も随分出るだア」

「今でも困つた人間が居るかね」

ちゆうおやぢ

中老漢は岩の上に卸した背負籠になを担つて、其儘そのまゝ歩き出さう

として居たが、自分に尋ねられて、

「つい、今もそれで大騒ぎをして居るだア」

と言つた。

そして、その大騒の何を意味して居るかを語らずに、其儘急い

で向ふへと下りて行つて了つた。自分は猶少時しばらく其処に立つて、六年前の友が何んな生活を為て居るであらうかといふ事、其妻は如何なる人で、其家は如何なる家で、その家庭は何んな具合であるかといふ事などを思ふと、種々なる感想が自分の胸に潮のやうに集つて来て、其山中の村が何だか自分と深い宿縁を有つて居るやうな気が為て、何うも為らぬ。

一時間後には、自分はもう其懐かしい村近く歩いて居た。成程山又山と友の言つたのも理と思はるゝばかりで、溪流はその重り合つた山の根を根気よく曲り曲つて流れて居るが、或ところには風情ある柴の組橋くみはし、或るところには竜の住みさうな深い青淵あをふち、或は激湍沫げきたんあわを吹いて盛夏猶寒しといふ白玉の溪はくぎよくたにがは、或は白はくれ

簾虹んにじを掛けて全山皆動くがごとき飛瀑ひばくの響、自分は幾度足を留

めて、幾度激賞の声を挙げたか知れぬ。で、その曲り曲つた溪流

に添つて、涼しい水の調しらべに耳を洗ひながら、猶三十分程も進んで

行くと、前面むかふが思ひも懸かけず俄にはかに開けて、小山の丘陵のごとく

起伏して居る間に、黄くわう稻たうの実れる田、蕎麦の花の白き畑、鬱こ

蒼んもりと茂れる鎮守の森、ところどころに基石を並べたやうに、散

在して居る茅茸かやぶきの人家。

手帳の画がすぐ思出された。

あゝこの静かな村！ この村に向つて、自分の空想勝なる胸は

何んなに烈しく波打つたであらうか。六年間、思ひに思つて、さ

て今のこの一瞥いちべつ。

殊に、自分は世の塵の深きに泥れまみ、久しく自然の美しさに焦れこがた身、それが今思ふさまその自然の美を占める事が出来る身となつたではないか。この静かな村には世に疲れた自分をやさしく慰めて呉れる友二人まであるではないか。

顧ると、夕日は既に低くなつて、後の山の影は速くその鎮守の森に及んで居る。壁はいよゝゝ深ふかみどり碧の色を加へて、野中の大杉の影はくつきりと線を引いたやうに、その午後の晴やかな空に聳そびえて居る。山県の家は何でもその大杉の陰と聞いて居たので、自分は眼を放つてじつと其方そなたを打見やつた。

静かな村！

五

と思つた途端、ふと自分の眼に入つたものがある。大杉の陰に
 簇々むら／＼と十軒ばかりの人家が黒く連つて居て、その向ふの一段高
 い処に小学校らしい大きな建物があるが、その広場とも覺しきあ
 たりから、二道の白い水が、碧みどりなる大空に向つて、丁度大きな噴
 水器を仕掛たごとく、盛さかんに真直に迸へいしゆつ出して居る。

そしてその末が美しく夕日の光にかゞやき渡つて見える。

「あれは何だね」

折から子供を背負つた十歳とをばかりの洩はなたら垂しの頑童わんぼくが傍そばに來たので、怪んで自分は尋ねた。

「あれア、唧筒ポンプだい」

と言つたが、見知らぬ自分の姿に其儘走つて行つて了つた。

成程唧筒ポンプに相違ない。けれどこの静かな山中の村にあのやうな

唧筒！ 火事などは何十年有らうとも思はれぬこの山中に、あの

やうな唧筒の練習！ 自分は何だか不思議なやうな気が為して仕方

が無かつたが、これは只何たゞの意味も無い練習に止とどまるのであらう

と解釈して、其儘其村へと入つて行つた。先最初まづに小さい風情ふぜいあ

る溪橋、その畔ほとりに終日動いて居る水車、婆様ばあさんの繰いとぐるま車を回し

ながら片手間に商売をして居る駄菓子屋、養蚕やうさんの板籠を山のぐ

とく積み重ねた間口の広い家、娘の唄うたを歌ひながら一心に機はたを織おつ

て居る小屋など、一つくあ頭あはれるのを段々先へ先へと歩いて行

くと、高低定らざる石の多い路の凹処には、水が丸で洪水の退いた跡でもあるかのやうに満ち渡つて、家々の屋根は雨あがりの後のごとく全く湿ひ尽して居る。

否、そればかりではない、それから大凡十間ばかり離れたところには、新しい一箇の赤塗の大きな唧筒が据ゑられてあつて、それから出て居る一箇のツツクの管は後の尾谷の溪流に通じ、二箇の径五寸ばかりの管は大空に向つて烈しい音を立てながら、盛んに迸出して居るのを認めた。

其周囲には村の若者が頬かぶりに尻はしよりといふ体で、その数大凡三十人許り、全く一群に為つて、頻りにそれを練習して居る様子である。唧筒の水を汲み上げるもの、ツツクの管を荷ふ

もの、管の尖さきを持つて頻りに度合を計つて居るもの、やれ今少し力を入れるの、やれ管が少し横に曲るの、やれ洩るの、やれ冷いのと、それは一方ひとかたならぬ大騒で、世話人らしい印しるし半纏はんてんを着た五十格かつかう好ちゆうの中老漢ちゆうおやぢが頻りにそれを指図して居るにも拘かはらず、一同はまだ好く唧筒の遣つかひ方に慣なれぬと覺しく、管から迸出する水を思ふ所に遣らうとするには、まだ余程困難らしい有様が明かに見える。一同は今水を学校の屋根に濺そがうとして居るので、頻りに二箇の管を其方向に向けつゝあるが、一度ひとたびはそれが屋根の上を越えて、遠く向ふに落ち、一度は見当違ひに一軒先の茅かやぶ葺屋根きを荒し、三度目には学校の下の雨戸へしたゝか打ち付けた。

「やあ！」

と後で喝采かつさいした。

見ると、路の傍、家の窓、屋根の上、樹きの梢こずゑなどに老若男女ほとん殆ど全村の人を尽したかと思はるゝばかりの人数が、この山中に珍しい唧筒ポンプの練習を見物する為めに驚くばかり集つて居るので、旨うまく行つたとては、喝采し、拙まづく行つたとては、喝采し、やれ管が何どうしたの、やれ誰ださんがずぶ濡ぬれになつたのと頻りに批評を加へるのであつた。

余り面白いので、自分は思はず立留つてそれを見た。この多い若者うちの中に自分の友が交つて居はせぬかとも思はぬではなかつたが、さりとして別段それを気にも留めずに、只余たゞ念なく見惚みとれて居

た。自分の前には川に浸^つけてある方の管が蛇ののたくつたやうに
蟠^{わだかま}つて、其中を今しも水が烈しい力で通つて行くと覺しく、針の
やうな隙間から、しうくと音して烈しく余流が迸^{へい}出して居
る。で、一同はやつとの思ひで、其目的の学校の屋根に涼しい一
雨を降らせたが、ふと其群の一人——古い手拭^{かぶ}を被つて縞^{しま}の単衣^{ひとへ}
を裾短かに端折つた——が何か用が出来たと見えて、急いで自分
の方へ下りて来た……と……思ふと、二人は顔を見合せた。

「おや、君ぢや無いか」

と自分は言つた。

「やア富山……さん！」

と根本行輔は驚いて叫んだ。

丸きり六年逢あはぬのだが、その風貌ふうぼうといひ、その態度といひ、更に昔に変わらぬので、これを見ても、山中の平和が、直ぐ自分の脳に浮んだ。

渠かれは限りなき喜よろこび悦の色を其穏かな顔に呈して、頻りに自分の顔を見て居たが、不ふ図む傍たはらに立つて居る其家かどうの家童らしい十四五の少年を呼び近づけて、それに、この御客様を丁寧ていねいに家に案内せよといふ事を命じ、さて自分に向つては、

「失礼ですが、村の若い者でこんな事を遣り懸けて居ますで：
：一足先に家に行つて休んで居て下され。もうすぐ済むで、跡から直きに参じますだに」

自分は小童に導かれて、其そのまゝ儘根本行輔の家へと行つた。一方

稲の穂の豊年らしく垂れてゐる田、一方甜まくほうり瓜うまの旨さうに熟して居る畠の間の細い路を爪先上りにだら／＼とのぼつて行くと、丘と丘との重り合つた処の、やゝ低く凹くぼんだ一帯の地に、一棟の茅葺かやぶき屋根と一つの小さい白壁造の土蔵とがあつて、其後には櫨けやきの十年ほど経つた疎まばらな林、その周囲には、蕎麦そばや、胡瓜きゅうりや唐瓜たうなや、玉蜀黍たうもろこしなどを植ゑた畠、猶なほ近づくくと、路の傍に田舎みなかには何処にも見懸ける不潔な肥料溜こやしだめがあつて、それから薪まきを積み重ねた小屋、雑草あげたの井桁あげたの間に満遍なく生えて居る古い井ゐど、高く夕日の影に懸つて見える桔はねつるべ※、猶その前に、鍬くはや鋤すきを洗ふ為めに一間四方ばかり水溜うがが穿たれてあるが、これはこの地方に特有で、この地方ではこれを田池たねけと称となへて、その深さは殆ど人の肩を没す

るばかり、鯉こひ、鮒ふなの魚類をも其中に養つて、時には四五尺の大き
さまで育てる事もあるといふ話。周囲には萱かややら、薄すゝきやらの雑草
が次第もなく生ひ茂つて水際には河骨かうほね、撫子なでしこなどが、やゝ濁
つた水にあたらその美しい影をうつして、居るといふ光景であつ
た。山県の話に、自分が十五六の悪戯いたづら盛ざかりには相棒の杉山とよ
くこの田池たねけの鯉を荒して、一夜に何十尾といふ数を盗んで、殆ど
仕末に困つた事があつたとの事を聞いて居つたが、その所謂いはゆる田
池がこんな小さな汚穢きたない者とは夢にも思つて居らなかつた。否、
其友の家——村一番の大尽の家をもこんな低い小さいものとは？
ふと見ると、その田池に臨んで、白い手拭を被つた一人の女が、
頻しきりに草刈鎌を磨いで居る。

「神さまかみア、旦那様だんなさまに吩咐いひつかつて、東京の御客様ごきゃくさまア伴つれて来たゞア」

と小童は突だしぬけ如けに怒鳴どなつた。

女は驚おどろいて顔を上げた。何処どこと言いつて非難ひなんすべきところは無いが、色の黒い、感覺かんかくの乏おほくろしい、黒々と鉄漿てつじやうを附つけた、割合わりあに老ふるけた顔かほで、これが友の妻とすぐ感附かんづいた自分は、友の姿すがたの小さく若々わかししいのに比べて、いかにこの妻の丈高ぢやうたかく、体格ていかくの大きいかといふ事に思おもひ及およんだ。これは大方東京で余あまり「老おいいたる夫おとこと若い妻つま」との一行いっぺいを見馴みれた故せゐであらう。

自分はその妻の手に由よつて、直ただちに友の父なる人に紹介しょうかいされた。父なる人は折のしも鋸のこぎりや、鎌かまや、唐瓜たうなすや、糸屑いとくずなどの無茶苦茶むぢあぢに

散ちらばつて居る縁側に後向に坐つて、頻りに野菜の種を選えりわ分けて居るが、自分を見るや、兼ねて子息むすこから噂うはさに聞いて居つた身の、さも馴々しく、

「これはく東京の先生——好よう、まア、この山やま中んなかに」

といふ調子で挨拶あいさつされた。

流石さすがは若い頃江戸に出て苦労したといふ程あつて、その人を外そらさぬ話し振、その莞爾にこくと満面に笑ゑみを含んだ顔色かほつきなど、一見して自分はその尋常ならざる性質を知つた。輪廓の丸い、眼の鋭い、鼻の尖とがつた顔のつくりで、体格は丸で相撲取でもあるかのやうに、でつぷりと肥つて、体重は二十貫目以上もあらうかと思はれるばかりであつた。これが当年の無頼漢ぶらいかん、当年の空想家、当年の冒

険家で、一度はこの平和な村の人々に持余されて、菰こもに包んで千
 曲川に投込まれようとまで相談された人かと思ふと、自分は悠いうゑ
 遠んなる人生の不可思議を胸に覚えずには居られぬので。

此時、奴僕どぼくらしい三十前後の顔の汚い男が駆けて遣つて来て、
 「大旦那さア、がいに暑いんで、馬が疲れて、寝そべつて、起き
 ねえが、はア何どう為すべい」
 と叫んだ。

「また寝そべつたか、困るだなア、汝われ、余り劇ひどく虐使こきつかふでねえ
 か」

「虐使ふどころか、此間こねえだも寝反ねそべつただから、四俵つけるところ
 を三俵にして来ただアが」

「何処へ寝反つてるだ」

「孫右衛門どんの垣の処の阪で、寝反つたまゝ何うしても起きねえだ。己あ何うかして起すべい思つて、孫右衛門さん許へ頼みに行つただが、少い娘つ子ばかりで、何うする事も為得ねえだ」

「仕方の無え奴等だ」

と罵倒したが、傍に立つて居る子息の妻に向つて、

「ぢや御客様にはえらい失礼だが、私あ馬を起しに行つて来るだあから、お前は御客様を奥に通して、行輔が歸つて来る迄、緩り御休ませ申して置け」

自分に向つては、

「それぢや、先生様失礼しやす！」

自分の挨拶をも聞かず、

「一所に歩あゆべ……おい、作公、何を愚図くしてやがるんだ？」
と怒鳴りながら走つて行つた。

同時に自分は奥の一室へと案内される。奥の一室——成程此処は少しは整頓して居る。床の間には何どんな素しろ人ろうとが見ても贗にせと解り切つた文晁ぶんてうの山水さんすゐが懸かつて居て、長押ながしには孰いづれ飯山あたりおちぶれの零落おちぶれ士族から買つたと思はれる槍が二本、さも不遇を嘆じたやうに黒く燻くすぶつて懸つて居る。けれど都とは違つて、造作は確しつ乎りとして居るし、天井は高く造られてあるから風の流通もおのづから好く、只ただ、馬小屋の蠅さへ此処まで押寄せて来なければ、中々居心の好い静かな室へやであるのだが……

やがて妻君は茶器を運んで来たが、おづくおづくと自分の前に坐つて、そして古くなつた九谷焼の急須きふすから、三十目くらゐの茶を汲んで出した。

「田舎は静かで好いですナア」

と自分はそれとなく言ふと、

「いゝえ、静かどころでは、……此頃は、はア、えらく物騒で……」

「何うしてゝす」

と自分は怪んで尋ねた。

「此頃は、はア、えらく火事があるんで、夜もゆつくり寝ては居られないで、はア」

「何うしてゝす？」

「何うしてといふ訳も無えだすが……」

と躊躇ふのを、

「放火なのですか」

「はア」

「誰か悪い者でもあるんですか」

「はア、悪い者があつて、どうも困り切りますだア」

しばらく
暫時 沈黙。

「はア」と自分は緩い茶を一杯啜つてから、「それでですナア、

今唧筒を稽古して居るのは？」

「貴郎さまも見て御座らしやつたゞか、火事が、はア、毎晩のや

うにあつて、物騒で、仕方が無えもので、村で、割前で金のう
集めて、漸く東京から昨日唧筒が出来て来ただア」

「東京から唧筒？」

「はア、昨日出来て来たばかりで……村にやもう何十年と火事な
んぞは無いだで、唧筒なんぞは有りませんでした。今度は、は
ア仕方が無えのでごわす。そして、今夜にも火事が打始
え者でも無えといふので、若い者が午から学校へ寄り集つて、唧
筒の稽古を為て居るんでごわす。……」と少時途絶えて、「でも、
……大方水は撒いたやうだで、もう直き帰つて来るでござしやう」
と言つたが、更に気を更へて、

「まあ、御疲れだせうに、緩くり横にでも成つて休まつしやれ。」

牟礼には三里には遠いだから」

と古い黒塗の枕を出して、そして挨拶して次の室へ下つた。

見ると、中々好い眺望である。地位が高いので、村の全景が

すつかり手に取るやうに見えて、尾谷川の閃々と夕日にかゞや

く激湍や、三ツ峯の牛の臥たやうに低く長く連つて居る翠微や、

猶少し遠く上州境の山が深紫の色になつて連り亘つて居る有様や、

ことに、高社山の卓れた姿が、此処から見ると、一層魁偉の

趣を呈して居るので、その雲煙の変化が少なからず、自分の心を

動かしたのであつた。あゝこの平和な村！ あゝこの美しい自然

！ と思ふとすると、今言つた妻君の言葉がゆくりなく簇々と

自分の胸に思ひ出された。この平和な村に唧筒！ この美しい村

に放火！ 殊に何十年とそんな例ためしが無かつたといふこの村に！

これは何か意味が無くてはならぬ。これは必ず不自然な事があつたに相違ないと自分は思つた。空想勝なる自分の胸は今しもこの山中にも猶絶えない人生の巴うづまき渦の烈しきを想像してうた転た一種の感うたに撲れたのであつた。

六

「放火つげびが流行はやるツて言ふが、一体何どうしたんです？」

かう言つて自分は友たづに訊ねた。これは一時間程前、友はその唧ポ筒ンブの稽古から歸つて来て、いろ／＼昔の事や、よくこんな山やまな山やま

中かに来て呉れたといふ事や、余り突然なので吃驚びつくりしたといふ事や、六年ぶりの何や彼かやを殆ど語り尽した後で、自分の前には地酒まづいの不味まづいのながら、二三本の徳利が既に全く倒されてあつて、名物の蕎麦そばが、椀に山盛に盛られてある。妻君は、田舎流儀あなかの馳走振すきに、日光塗の盆を控へて、隙すきが有つたなら、切込まうと立構へて居るので、既に数回の太刀打たちうちに一方ひとかたならず参つて居る自分いたは、太くそれを恐れて居るのであつた。友も稍酔やつた様子で、漸やうやく戸外おもての闇くらくなつて行くのを見送つて居たが、不意に、かう訊たづねられて、われに返つたといふ風で、

「本当に因しまつて了しまふですア、夜も碌々ろくく寝られないのですから」
 「それで、一体、犯罪者が解らんのかね？」

「それア、もう彼奴きやつと極きまつて、居るんだが……」

「何故なぜ、捕縛とらしないのだね？」

「それが田舎ですア……」と友は言葉を意味あり気に長く曳いて、
「駐在所に巡查ア、一人来て居る事は居るんですが、田舎の巡查
なんていふ者は、暢気のんきな者だで、嫌疑けんぎが懸つたばかりでは、捕縛
する事ア出来ん。現行犯でなければ……とかう言つて済まして居
りやすだア。一体、巡查先生の方がびく／＼して居るんで御座ごわす
ア、だもんだで、彼奴きやつア、好い氣なに為つて、始めからでは、もう
十五六軒もツン燃やしましたぜ」

「十五六軒！」

「この小さい村、皆な合せても百戸位しか無いねこの小さい村に、

十五六軒ですだで、村開かいびやく關かん以来の珍事として、大騒を遣つて居りますだア」

「それは左様さうだらう」

少しばらく時た経つてから、

「で、一体、その悪わるもの漢は何者だね、村の者かね」

「はア、村の者でさア」

「村の者で、それでそんな大胆な事を為するといふのは、其処に何か理由がある事だらうが……」

「何アに、はア御話にも何にもなりやしやせん。放蕩どらもの者で、性質たちが悪くつて、五六年も前から、もう村の者ア、相手に仕なかつたんでござすから」

「まだ若いのかね」

「いや、もう四十二三……」

「それぢや ふんべつざかり 分別盛だのに……」

と自分は深く考へた。

「御口にア、合ひますめいけど、何にもがアせんだに、せめて、蕎麦など上つてお呉れんし」

と妻君は盆を出した。

自分はもう十分であるといふ事を述べて、そして蕎麦の椀を保護すべく後に遺つた。それでは御酒ごしゆでもと妻君は徳利を取上げたので、それをも辞義してはと、前のを飲干して一杯受けた。

「それにしても……」と自分は口を開いて、

「十何回も放火を為るのに、一度位実行して居るところを見付けさうな者ですがナア」

「それが、彼奴きやつが実行するのなら、無論見付けない事は無いだすが、彼奴の手下に娘あまつ子こが一人居やして、そいつが馬鹿にすばしつ敏びん捷こくつて、丸で電いなづま光ひかりか何ぞのやうで、とても村の者の手には乗らねえだ」

「それは奴の本当の娘なんですか」

「否いや、今年の春頃かゝおはから、鼻代りに連れて来たんだといふ話で、何でも、はア、芋いも沢さあたりはの者だつて言ふ事だす。此奴が仕末におへねえ娘あまつ子こで、稚ちひさい頃きから、親も兄弟もなく、野原で育つた、丸けだもので獸けだものといくらも変らねえと云ふ話で、何でも重右衛門（嫌疑者

の名いひつなはら）が飯綱原いひつなはらで始めて春情いひことを教へたとか言いふんで、それから
 は、村へ来て、鼻の代りを勤めて居るが、これが実まことに手におへね
 えだ。重右衛門が自身手を下すのでなく、この獣のやうな娘むすめつ子
いひつに吩附いひつけて火を放つけさせるのだから、重右衛門と言ふ事が解つて
 居ても、それを捕縛するといふ事は出来ず、さればと言つて、娘
 つ子は敏捷すばしこくつて、捕へる事は猶なほ々出来ず、殆ど困つて仕舞つた
 でがすア」

「年齢としは何歳位いくつ？」

「まだ漸やつと十七位のもんだせう」

「それが捕へる事が出来ないとは！ 高むすめが娘こつ子一人」

「知らない人はさう思ふのは無理は無いだす。高あまが娘こつ子一人、

それを捕へる事が出来ぬとは、余り馬鹿くしくつて話にも何にも為ならない様だが、それを知つて御覧なされ、それは実に驚いたもので、今其処に居たかと思ふと、もう一里も前に行つて居るといふ有様、若い者などがよく村の中央まんなかで邂逅でつくはして、石などを投はりつけて遣やる事が幾いくたび度もある相ですが、中々一人や二人では敵かなはない。反対あべこべに眉間みけんに石を叩たき付けられて、傷を負つた者は幾いくたり人もある。それで此方こつちが五人六人、十人と数が多くなると、屋根でも、樹でも、するくと攀よぢ上のぼつて、丸で猫でもあるかのやうに、森と言はず、田と言はず、川と言はず、直ちに遁にげて身を隠して了ふ。それは実に驚くべき者ですア」

此時、ふと、

「やあ！」

と言つて庭から入つて来た者があつた。見ると、それは懐しい
 山県行三郎君で、自分が来たといふ事を今少し前に知らせて遣つ
 たものだから、万事を差措さしおいて急いで遣つて来たのであつた。夏
 の夕は既に暮れて、夕暮の海の様やまに晴れ渡つた大空には、星が降
 るやうに閃きらめいて居るが、十六日の月は稍遅く、今しも高社山
 の真黒な姿の間から、其の最初の光を放たうとして、その先鋒せんぼう
 とも称すべき一帯の余光を既に夜露の深い野に山に漲みなぎらして居た。
 四辺あたりはしんとして、しつとりとして、折々何とも形容の出来ない
 涼しい好い風が、がさくと前の玉蜀黍たうもろこしの大きな葉を動かすば
 かり、いつも聞えるといふ虫の声さへ今宵こよひは何うしてか音を絶つ

た。でも、黙つて、静かに耳を敬そぼだてると、遠くでさら／＼と流れて居る尾谷川の溪流の響が、何だか他界から来るある微妙な音楽でも聞くかのやうに、極めて微かに聞えて居る。

疎まぼらな鎮守の森を透とほして、閃々きら／＼する燈火の影が二つ三つ見え出した頃には、月が已すでにその美しい姿を高社山の黒い偉大なる姿の上に顕あらはして居て、その流るゝやうな涼しい光は先第一まづに三みつ峯ねの絶巔いたゞきとも覺しきあたりの樹立こだちの上を掠かすめて、それから山の陰に偏かたよつて流るゝ尾谷の溪流には及ばずに直ちに丘ふもとの麓の村を照し、それから鎮守の森の一端を明かに染めて、漸やうやく自分等の前の蕎麦の畑に及んで居る。洋燈ランプをさへ点つけなければ、其光は我等の清宴の座みに充ちて居るに相違ないのである。

山県が来たので、一座の話に花が咲いて、東京の話、学校の話、英語の話、詩の話、文学の話、それからそれへと更にその興は尽きようともせぬ。果ては、自分は興きように堪へかねて、常々暗あん誦しようして居る長恨歌ちやうごんかを極めて声低く吟ぎんじ始めた。

「この良夜を如何いかんですナア」

と山県はしみ／＼感じたやうに言つた。

此時鎮守の森の陰あたりから、夜を戒いましめる柝ひやうしぎ木の音がちかくと聞えて、それが段々向ふへくと遠とほざかつて行く。

「今夜の柝木番は誰だえ、君ぢや無かつたか」

と根本は山県に訊たづねた。

「私わしだつたけれど、……富山君が来たと謂いふから、松本君に頼ん

で、代つて貰つたんです。その代り今夜十時から二時間ばかり忍びの方を勤めさせられるのだ」

「僕も二時から起される訳になつて居るんだが」と言つて、急に言葉を交へて、「それから、先程さつき聞くと、昼間あの娘つ子が唧筒ポンプの稽古を見て居たと言ふが、それア、本当かね」

「本当とも……総左衛門どんこしやくの家の角の処で、莞爾にこく笑ひながら見てけつかるだ。余り小癩こしやくに触るつて言ふんで、何でも五六人ばかり許で、撲なぐりに懸つた風なもんだが、巧くわいにその下を潜くぐつて狐のやうに、ひよんく遁にげて行つて了つたさうだ。……それから重右衛門も来て見物して居たぢやないか」

「重右衛門も？」

「あの野郎、何処まで太いんだか、見物しながら、駐在所の山田に喧嘩見たやうな事を吹懸けて居たつけ。何んだ、この藤田重右衛門が駐在所の巡查なんか恐れやしねえ、何んだ村の奴等ア、唧筒シンプなんて、騒ぎやがつて、それよりア、この重右衛門に、お酒でも上げた方が余程効能きくめがあるんだ。ツて、大きな声で嘔ぬかして居やがつたつけ。何でも酒を余程飲んで居た風だつた」

「誰が酒を飲ましたのか知らん」

「誰がツて……野郎、又威嚇文句おとしで、又兵衛（酒屋の主人）の許とこへ行つて、酒の五合も喰くらつて来たんだ」

「困り者だナア」

と根本は心しんから独語つぶやいた。

「それから、言ふのを忘れたが、……先程さつぎ此処こゝに来る時、あの森の傍で、がさ／＼音が為するから、何かと思つて、よく見ると、あの娘つ子め、何かまご／＼捜して居る。此奴怪こいつしいと思つたから、何を為してるんだ！ と態わざと大い声でかを懸かけて遣つた。すると、猫のやうな眼で、ぎよろツと僕を見て、そしてがさ／＼と奥の方に身を隠して了つた。丸で獸ちつに些ちつとも違はない……それから、私は、会議所に行つて、これ／＼だから注意して呉れと言つて来た」

自分は二人の会話を聞きながら、山中の平和といふ事と、人生の巴うづまき渦まきといふ事を取留とりとめもなく考へて居た。月は段々高くなつて、水の如き光は既に夜の空に名残なごりなく充ち渡つて、地上に置き余つた露は煌きら／＼々／＼とさも美しく閃きらめいて居る。さらぬだに寂せき寞ぼく

たる山中の村はいよくしんとして了つて、虫の音と、風の声と、水の流るゝ調べの外には更に何の物音も為ぬ。

一時間程経つた。

すると、不意に、この音も無くしんとした天地を破つて、銅鑼を叩いたなら、かういふ厭な音が為るであらうと思はれる間の抜けたしかも急な鐘の乱打の響！

二人は愕然とした。

「又遣付けた！」

と忌々しさうに叫んで、根本の父は一散に駆けて行つた。

「桑さんの家だ、桑さんの家だ」

と、誰か向ふの畔を走りながら、叫ぶ者がある。山県はちらと

見たが、「あ、僕の家らしい！」と叫んで、そして跣足はだしの儘ま、慌あわてて飛出した。

根本も続いて飛出した。

見ると、月の光に黒く出て居る鎮守の森の陰から、やゝ白けた一通の烟けむりが蜃気楼しんきろうのやうに勢よく立のぼつて、其中から紅あかい火が長い舌を吐いて、家の燃える音がぱちくと凄すさまじく聞える。山際の寺の鐘も続いて烈しく鳴り始めた。

一散に自分も駆け出した。

田の畔くろを越えて、丘の上を抜けて、谷川の流を横よこぎつて、前から、後から、右から、左から、其方向に向つて走り行く人の群、それが丁度大海に集るごとく、鎮守の森の陰の路へと進んで来るので、いつも平生ならば人も滅多に來ない鎮守の森の裏山は全く人の影を以てうづ填められて了つた。自分は驅出す事は驅出したが、今日來たばかりで道の案内も好く知らぬ身の、余り飛出し過ぎて思ひも懸けぬ災難に逢あつては為ならぬと思つたから、其儘少し離れた、小高いところつかに身を寄せて、無念ながら、手を束つかねて、友の家の焼けるのをじつと見て居た。

眼前に広げられた一場の光景！ 今燃えて居るのは丁度鎮守の森の東表に向つた、大きな家で、火は既にその屋やねに及んで居るけ

れど、まだすつかり燃え出したといふ程ではなく、半分燃え懸けた窓からは、くすぶ 燻つた黒い色の烟けむりがもくくと凄すさまじく迸り出でて、それがすつかり火に為つたならば、下の二三軒の家屋は勿もちろん論、前の白壁の土蔵も危くはありはせぬかと思はれるばかりであつた。けれど消防組はまだ一向見えぬ様子で、昼間盛んに稽古して居たその新調の唧筒ポンプも、まだ其現場に駆け付けては居らなかつた。暫しば時ばらくすると、燻くすぶつて居た火は恐ろしく凄じい勢でぱつと屋根の上に燃え上る……と……あたり四辺あたりが急に真昼のやうに明るなつて、其処等に立つて居る人の影、辛からうじて運び出した二三の家具、其他いろ／＼の悲惨な光景が、極めて明かに頭あはれて見える。火は既に全屋に及んで、その火の子の高く騰あがるさまの凄じさと言つたら、

無い。幸ひに風が無いので、火勢は左程さほど四方には蔓まんえん延せぬけれど、下の家の危さは、見て居ても、殆ど冷汗が出るばかりである。

「唧筒ポンプ！」

と叫ぶ声。

「おい、唧筒は何を為して居るだアーい」

と長く曳いて叫ぶ声。

けれど、本当に何うしたのか、唧筒はまだ遣つて来るやうな様子も見えぬ。屋根の焼落つる度たびに、美しく火花を散した火の子が高く上つて、やゝ風を得た火勢は、今度は今迄と違つて土蔵の方へと片かたなび靡ふきがして来た。土蔵の上には五六人ばかり人が上つて頻しきりに拒ふせいで居た様子だったが、これに面めん喰くらつてか、一人く

下りて、今は一つの黒い影を止めなくなつて了つた。

「熱つくて堪らねえ」

「まご／＼して居ると、焼死んで了ふア」

「何うしやがつたんだ。一体、唧筒ポンプは？ 気が利きかねえ奴等でね

えか」

と土蔵から下りて来た人の会話らしい声がすぐ自分の脚あしもと下に聞える。

と、思ふと、向ふの低い窪地くぼちに簇々むら／＼と十五六人許ばかりの人数あたらが顕はれて、其処に辛うじて運んで来たらしいのは昼間見たその新調の唧筒である。

やがて火光に向つて一道の水が烈しく迸へいしゆつ出したのを自分は

認めた。

「唧筒ポンプ確しつかり頼たのむぞい！」

「確たかり遣やれ」

「唧筒ポンプ！」

と彼方あつち此方こつちから声が懸かる。

で、その唧筒ポンプの水の方向は或は右に、或は左に、多くは正せい鵜こくを得えなかつたにも拘かはらず、兎とに角かく、多量の水がその方面に向つて灑そがれたのと、幸ひ風があまり無かつたのとで、下なる低い家屋にも、前なる高い土蔵にもその火を移す事なしに、首尾よく鎮火したのである。

それが丁度十時二十分。

疲れたから、帰つて、寝ようかとも思つたが、火事後の空はいよ／＼澄んで、山中の月の光の美しさは、此の世のものとは思はれぬばかりであるから、少し溪流の畔ほとりでも歩いて見ようと、其そのまゝ、儘焼跡をくるりと廻つて、柴の垣の続いて居る細い道を静かに村の方へと出た。

村へ出て見ると、一軒として大騒を遣つて居らぬ家は無く、鎮火と聞いて孰いづれも胸を安めたやうなもの、かう毎晩の様に火事があつては、とても安閑として生活して居られぬといふそは／＼した不安の情が村一体に満ち渡つて、家々の角には、婦をんなやら、老としよ人りやらが、寄つて、集たかつて、いろ／＼喧かしましく語り合つて居る。「本当にかう毎晩のやうに火事があつては、緩ゆっくり寝ても居られ

ねえだ。本当に早く何うか為て貰はねえでは……」

「駐在所ぢや、一體何を為て居るんだか、はア、困つた事だ」

前の老人らしい声で、

「駐在所で、仕末が出来ねえだら、長野へつゝ走つて、何うかして貰ふが好いし、長野でも何うも出来ねえけりや、仕方が無えから、村の顔役が集つて、千曲川へでも投込んで了ふが好いだ」

「本当に左様でも為て貰はねいぢや……」

猶少し行くと、

「まご／＼してると、己が家もつん燃されて了ふかも知んねえだ。

本当にまア、何うしたら好い事だか」

「困つた事だ」

とさも困つたといふやうな調子。

聞流して又少し歩いた。

「重右衛門がこんな騒動さわぎを打始めぶつぱしようとは夢にも思ひ懸けなかつたゞ。あれの幼い頃はお互たげへにまだ記憶おぼえて居るだが、そんなに悪い餓鬼がきでも無かつたゞが……」

かう言つたのは年の頃大凡およそ六十五六の皺しわくちやの老婆であつた。それに向つて立つて居るのも、これも同じく其年輩らしい老婆の姿で、今しも月の光にさも感に堪へぬといふ顔色かほつきを為したが、前の老婆の言葉を受けて、「本当でござすよ。重右衛門は、妾わしの遠い親類筋だで、それでかう言ふのではごんせぬが、何アに、あれで

も旨くさへ育てれや、こんな悪党にや為りや仕ないんだす。一体
祖父様が悪かつただす。余り可愛がり過ぎたもんだで……」

「だから、子供を育てるのも、容易には出来ねえだ」
と他の老婆は言葉を合せた。

自分は其前をも行過ぎた。

すると、路の角に居酒屋らしいものがあつて、其処には洋燈が
明るく点いて居るが、中には七八人の村の若者が酒を飲んで、頻
りに大きい声を立て居る。

立留つて聞くと、

「重右衛門は火事の中何処に行つて居たツて？」

「奴か、奴ア、直き山県さんの下の家に行つて、火事見舞に来た

とか、何とか言つて、酒の馳走になつてけつかつた。あの位凶太い奴ア無いだ」

「さういふ時、思ふさま、酒喰くらはして、ぐつと遣つて仕舞へば好いんだ」

「本当にそれが一番早道だア、と我おらア、いつでも言ふんだけど、まさか、それも出来ねえと見えて、それを遣つて呉れる人が無えだ」

「忌いめ々しい奴だなア」

と其中の一人が叫んだ。

自分は又歩き出した。路が其処から川の方に曲つて居るので、それについて左に曲り、猶半町なほほど辿たどつて行くと、もう其処は尾

谷川の崖^{がけ}で、石に激する水声が、今迄種々^{いろく}な悪声を聞いた自分の耳に、殆ど^{ほとん}天上の音楽の如く聞える。月はもう高くなつたので、溪流の半面はその美しい光に明かに輝いて居るが、向ふに偏^{かたよ}つた半面には、また容易に其光が到着しさうにも見えぬ。自分は崖に凭^よつて、そして今夜の出来事を考へた。友の言葉やら、村の評判やらから綜^{そうがふ}合して見ると、この事件の中心に為^なつて居る重右衛門といふ男は確かに自暴自棄に陥つて居るに相違ないと自分は思つた。けれど何うして渠^{かれ}はその自暴自棄の暗い境に陥つたのであらうか。先程の老婆の言ふ所によれば、祖父様が悪いのだ、あまり可愛がり過ぎたから、それで彼様^{あん}な風に為つたのだと言ふけれど、単に愛情の過度といふのみで、それで人間が、己^{おのれ}の故郷の家

屋を焼くといふ程の烈しい暗黒の境きやうに陥るであらうか。殊に此村には一種の冒険の思想が満ち渡つて居て、もし単に故郷いに容れられぬといふばかりならば、根本の父のやうに、又は塩町の湯屋のやうに、憤いきどほりを発して他郷に出て、それで名譽を恢くわいふく復ためしした例は幾許いくばくもある。であるのに、それを敢あへて為しようと為せず、かうして故郷の人に反抗して居るといふのは、其処に何か理由が無くてはならぬ。その理由は先天的性質か、それとも又境遇から起つた事か。

種々に空想たくましを逞たくましうしたが、未だ其人をさへ見た事の無い身の、完全にそれを断定することが何うして出来よう。遂つひに思切つて、そして帰宅すべく家路に就いた。路は昼間小せうどう僮どうに案内して貰つ

て知つて居るから別段甚しく迷ひもせず、やがて緑樹の鬱蒼こんもりと生ひ茂つた、月の光の満足にさし透とほらぬ、少しく小暗をぐらい阪道へとかゝつて来た。村の方ではまだ騒いで居ると見えて、折々人声は聞えるけれど、此の四辺あたりはひっそりと沈まり返つて、木の葉はの戦そよぐ音すら聞えぬ。自分は月の光の地上に織り出した樹の影を踏みながら、阪の中段に構へられてある一軒の農家の方へと只無意たゞ味に近づいて行つた。

すると、その家の垣根の前に小さな人の影があつて、低頭うつぶきになつて頻りに何か為て居るではないか。勿論家の蔭であるから、それと分はつきり明とは解らぬが、その影によつて判断すると、それは確かに大人で無いといふ事がよく解る。自分は立留つた。そして

樹の蔭に身を潜めて、暫しその為様を見て居た。

ぱつとマツチを擦る音！

同時に

「誰だ！」

と叫んで自分は走り寄つた。けれどその影の敏捷なる、とても人間業とは思はれぬばかりに、走寄る自分の袖の下をすり抜けて、電光の如く傍の森の中に身を没して了つた。跡には石油を灑いだ材料に火が移つて盛に燃え出した。

「火事だ、火事だア」

と自分は声を限りに叫んだ。

藤田重右衛門と言ふのは、昔は村でも中々の家柄で祖父の代までは田の十町も所有して、小作人の七八人も遣つた事のある身分だといふことである。家は丁度尾谷川に臨んだ一帯の平地にあつて、櫛の疎らな並樹がぐるりと其の周囲を囲んで居る奥に、一棟の母屋、土蔵、物置と、普請も尋常よりは堅く出来て居て、村に何か事のある時には、その祖父といふ人は必ず総代か世話人
 に選ばれるといふ程の名望家であつた。現に根本三之助の乱暴を働いた頃にも、その村の相談役で、千曲川に投込んで了へと決議した人の一人であつたといふ。性質の穏かな、言葉数の少な

い、慈愛心の深い人で、殊に学問——と謂ふ程でも無いが、御家流りうの字が村にも匹敵ひつてきするものが無い程上手で、他村への交渉、飯山藩の武士への文通などは皆この人に頼んで書いて貰ふのが殆ど例になつて居たといふ事である。この人は千曲川の対岸のおほまた大俣といふ処から、妻を娶めとつたが、この妻といふ人も至極好物で、貧乏者にはよく米を遣つたり、金銭を施したりして、年が老つてからは、寺参りをのみ課業として、全く後生ごしやうを願ふといふ念より外に他は無ほかかつた。であるのに、僅わづか一代を隔てて、何うしてこんな不幸がその藤田一家を襲つたのであらうか。何うしてその祖父祖母の孫に今の重右衛門のやうな、乱暴無慚むざんの人間が出たのであらうか。

その優しい正しい祖父祖母の間に、仮令女たとへでも好いから、まことの血統を帯びた子といふ者が有つたなら、決してこんな事は無かつたらうとは、村でも心ある者の常に口に言ふ所であるが、不幸にもその祖父祖母の間には一人の子供も無かつたので、藤田の系統けつとうを継つがしむるために、二人は他の家から養子を為なければならなかつた。今の重右衛門の父と言ふのは、芋沢のさる大尽の次男で、母は村の杉坂正五郎といふものの三女である。何方どちらも左程悪い人間と言ふではないが、否、現に今も子息むすこの事を苦にして、村の者に顔を合せるのも恥しいと山の中に隠れて出て来ぬといふやうな寧むしろ正直な人間ではあるが、さりとして、又、祖父祖母のやうな卓すぐれて美しい性質は夫婦とも露ばかりも持つて居らなかつた

ので、母方の伯父をぢといふ人は人殺をして斬罪ざんざいに処せられたといふ悪い歴史を持つて居るのであつた。で、この夫婦養子の間なかにもなく出来たのが、今の重右衛門。子の無い処の孫であるから、祖父祖母の寵愛ちようあいは一方ひとかたではなく、一にも孫、二にも孫と置よにも置かぬほどにちやほやして、その寵愛する様は、他所目よそめにも可笑をかしい程であつたといふ。処が、この最愛の孫に一つ悲むべきことがある。それは生れながらにして、腸の一部がかうぐわん臍丸なほに下りて居る事で、何うかしてこの大臍丸おほきんたまを治して遣やる方法は無いかと、長野まで態々わざく出懸けて、いろ／＼医者にも掛けて見たけれど、まだ其頃は医術も開けて居らぬ時代の事とて、一時は腸に収まつて居ても、又何かの拍子でたちまち忽地たちまち元に復して了ふので、い

くら可愛想に思つても、何う為る事も出来なかつた。

これが又一層不便ふびんを増すの料となつて、孫や孫やと、その祖父祖母の寵愛は益ます太甚はなはだしく、四歳よついつ五歳むつ、六歳は、夢のやうに掌たなごころの中に過ぎて、段々その性質があらはれて来た。けれど、子供の時分には、只非常に意地の強いといふばかりで、別段これと言つて他の童わらべに異つたところも無かつたといふ事だが、それでも今の老人の中には、重右衛門の子供にも似ぬ、一種茫ほんやり然したやうな、しつかりしたやうな、要領を得ない処があるのを記憶して居て、どうもあの子は昔から變つて居ると思つたと言ふ者もある。が、概して他の童にさしたる相違が無かつたといふのが、一般の評であつた。山県の総領の兄などはその幼い頃の遊び夥伴なかまで、よく一

所に蜻蛉とんぼを交つませに行つたり、草を摘みに行つたり、山葡萄やまぶどうを採とりに行つたり為た事があるといふが、今で、一番記憶に残つて居るのは、鎮守の境内で、鬼事おにごとを為る時、重右衛門は辜丸が大いものだから、いつも十分に駆ける事が出来ず、始終しよつちゆう中鬼にばかり為なつて居たといふ事と、山菜蓐やまぐみを採りに三峯に行つた時、その大辜丸を蜂に食はれて、家に帰るまで泣き続けて居たといふ事と、今一つ、よく大辜丸を材料たねにして、いろ／＼渾名あざなを付けたり、悪口を言つたり為するものだから、終しまひにはそれを言ひ始めると、厭いやな顔をして、折角せつかく樂しげに遊んで居たのも直ぐ止めて歸つて了ふやうになつたといふ事位のものであるさうな。けれど其先天的不具がかれの一生の上に非常に悲劇の材料と為つたのは事実で、

人間と生れて、これほど不幸ふしあわせなものには有るまい。それから愛情の過度、これも確かにかれの今日の境遇に陥つた一つの大なる原因で、大きくなる迄、孫や、孫やとやさしい祖父にちやほやされて、一時村の遊び夥伴なかまの中に、重右衛門と名を呼ぶ者はなく、孫や、孫やで通つたなども、かれの悲劇を思ふ人の有力なる材料になるに相違ない。

月日は流るゝ如く過ぎて、早くも渠かれは十七の若者となつた。其年の春、祖母は老病で死んで了つたが、此年ほど藤田家に取つて運の悪い年は無かつたので、其初夏には、父親が今年こそはと見当を付けて、連年の養やうさん蚕の失敗を恢くわい復ふくしようとして、非常に手をひろかかけて養つた蚕が、氣候の具合で、すつかり外はづれて、一時に田

地の半分ほども人手に渡して了ふといふ始末。かてて加へて、妻の持病の子宮が再発して、枕も上らず臥せつて居ると、父親は又父親で、失敗の自棄を医さん為め、長野の遊廓にありもせぬ金を工面して、五日も六日も流連して歸らぬので、年を老つた、人の好い七十近い祖父が、独りでそれを心配して、孫や孫やと頻りに重右衛門ばかりを力にして、何うか貴様は、親父のやうに意気地なしには為つて呉れるな、祖父の代の田地を何うか元のやうに恢復して呉れと、殆ど口癖のやうに言つて居た。

御存じでは御座るまいが、村には若者の遊び場所と言ふやうなものがあつて、（自分は根本行輔の口からこの物語を聞いて居るので）昼間の職業を終つて夕飯を済すと、いつも其処に行つて、

娘の子の話やら、喧嘩の話やら、賭博ばくちの話やら、いろ／＼くだらぬ話を為なて、傍かたはら物を食つたり、酒を飲んだりする処がある。今では学校が出来て、教育の大切な事が誰の頭脳あたまにも入つて来たから、さういふ下らぬ遊あそびを為なるものも少く為なつたけれど、まだ私等の頃までは、随分それが盛んで、やれ平右衛門の二番娘は容色きりやうが好いの、やれ総助の処の末の娘が段々色気が付いて来たのと下らぬ噂うわさを為なすばかりならまだ好いが、若者と若者との間にその娘に就ついての鞞さやあて当あてが始まる、口論が始まる、喧嘩が始まる、皿が飛ぶ、徳利が破これるといふ大活劇を演ずることも度々で、それは随分弊へいが多かつた。殊ととに其遊あそび場所の最も悪い弊へいと言ふのは、その若者の群の中にも自おのづから勢力の有るものと、無いものとの區別が

あつて、其勢力のある者が、まだ十六七の若い青年を面白半分に悪いところに誘つて行く、これが第一の弊だと思ふ。

私なども経験があるが、散々村の遊び場所で騒ぎ散して、さてそれから其処に集つて居る若者の総ての懐中すべを改めて、これなれば沢山たくさんとなると、もう大分夜が更け渡つて居るにも拘らず、其処から三里もある湯田中ゆだなかの遊廓へと押懸けて行く。其一群の中には、屹度きつと今夜が始めて……といふ初陣うひぢんの者が一人は居るので、それを挑おだてたり、それを戯からかつたり、散々ひやか翻弄しながら歩いて行くのが何よりも楽しみに其頃は思つて居た。そして又、村の若者の親なども、これはもう公然止むを得ざる事と黙許して居て、「家のせがれ忤せがれもはア、色気が附いて来たで、近い中に湯田中に遣らずばな

るめい、お前方めいがた附いて居て、間違の無いやうに遊ばして呉らつしやれ」とその兄分の若い衆に頼むものさへある。兎とに角かく、村の若い者で、湯田中に遊びに行かぬ者は一人も無く、又初めての翌朝、兄分の者に昨夜ゆうべの一伍一いちぶしじふ件を無理に話させられて、顔を赤くし為ないものは一人も無い。

重右衛門を始めて湯田中に連れて行つたのは、勝五郎といふ其頃有名な兄分で、今では失敗して行衛ゆくへ知れずになつて居るが、それがよく重右衛門の初陣の夜の事を得意になつて人に話した。

「重右め、不具かたはだもんだで、姫つ子が何うしても承知しねえ、二夜ばん、三夜ばん、五夜ばんほど続けて行つて、姫つ子を幾人も変へて見たが、何奴どいつも、此奴も厭だアつてぬかして言ふ事を聞かねえだ。朝にな

つて、あの田中の堤どての上を茫ぼんやり然り帰つて来ると、重右め、いつも浮かぬ顔をして待つて居る。昨夜ゆうべは何うだつたつて……聞くと、頭あたまを振つて駄目だめだと言ふ。それが余り幾夜も続くので、私も、はア、終つひには氣の毒になつて、重右だつて、人間だ。不具ふぐに生れたのは、自分われが悪いのぢやねえ。それなのに、その不具ふぐの爲めに、女を知る事が出来ねえとあつては、これア氣の毒だ。一つ肌を抜いで世話をして遣らうと思つて、それから私の知つて居る女郎屋かゝさまの唄うた様さまに行つてこれくくだつて話して遣つただ。すると、流石さすがは商売人だで、訳なく承知して呉れて、重右め、其処そこに行つて泊る事に為つただ。明日の朝、何んな顔をして居るかと思つたら、奴やつめ、莞爾にこくと笑つて居やがる。背中を一つ喰くはせて遣ると、

いひひくくくと笑やがったが、其笑ひ様つて言つたら、そりや形容たちにも話にも出来ねえだ。本当に、私あ、随分人を湯田中に連れて行つたが、重右の奴ぐらゐ、手数てかずの懸かつたのは無え」

と高く笑つて、

「それにしても、考へると、可笑をかくつてなんねえだよ。あので大い
鞆丸を拘へてよ、それで姫ツ子を自由しに為ようつて言んだから、
こいつは中々骨が折れるあ！」

と言ふのが例だ。

で、其からといふものは、重右衛門は好く湯田中に出懸けて行つたが、金を費つかふ割に余りちやほやされないので、つねに愠おふく々々として楽しまなかつたといふ事である。

其中には段々家は失敗に失敗を重ねて、祖父が一人真面目に心配して居るけれど、さてそれを何うする事も出来ず田地は益々手に渡つて、祖父の死んだ時（それは丁度重右衛門が二十二の時であつた）にはもう田でんばた畠合せて一町歩位しか無かつたとの話だ。ことに、その祖父の死ぬ時に一つの悲しい話がある。それは、其頃重右衛門は湯田中に深く陥つて居る女があつたとかで、家の衰へて行くのにも頓着せず、米を売つた代価とか、蚕かひこを売つた金とかありさへすれば、五両なり十両なりそれを残らず引ひつさら攫つて飛出して、四日、五日、その金の有らん限り、流みつゞけ連して更に家に帰らうとも為なかつた。父親と母親とは重右衛門とは始めから仲が悪いので、商売を為るとか言つて、其頃長野へ出て居つたから、

家には只死に瀕した祖父一人。その祖父は曾て孫を此上なく寵ちよう愛あいして、凡そ祖父の孫に對する愛は、遺憾なく尽して居つたにも拘らず、その死の床には侍つて居るものが一人も無いとは！

二日程前から病に罹つて、老人はその腰の曲つた姿を家の外に顯あらはさなかつたが、其三日目の晩に、あまり家の中がしんとして居ると言ふので、隣の者が行つて見ると、老人としより行あんくわ火よに凭り懸つたまゝ、丸くなつて打伏して居る。

「爺様！ 何うだね」

と声を懸けても、返事が無い。

「爺様！」

と再び呼んでも、猶返事を為なほようとも為ない。これは不思議だ

と怪んで、急いで傍に行つて見ると、体がぐたりとして水^{みづ}涕^{つばな}を出したまゝ、早既に締^{こと}が切れて居る。驚いて、これを村の世話役に報告する、湯田中の重右衛門に使を出す、と、重右衛門は遊廓の二階で、大擧丸を抱へて大騒を遣つて居る最中だつたさうで、祖父^{ぢふ}が死んだといふ悲むべき報知を聞いても、更に涙一つ滴^{こぼ}さうでもなく、「死んで了つたものは仕方が無え、明日歸つて、緩^{ゆつく}り葬^{ともれひ}礼を出して遣るから、もう歸つて呉れても好い」との無情な言草には、使の者も殆^{ほとん}ど呆^{あき}れ返つたとの事だ。

兎に角重右衛門は此頃からそろ／＼評判が悪くなつたので、その祖父の孫に対する愛を知つて居る人は、他村の者までも、重右衛門の最後の必ず好くないといふ事を私語^{さぐや}き合つたのである。

祖父が死んだので、父親母親はひとまづ一先村へ歸つて、少時しばらく其家に住んで居た。が、この親子の間柄あひだといふものは、祖父が余り過度に愛した故せみでもあらうが、それは驚くばかり冷ひやかで、何かと言つては、直ぢき親子で衝突して、撲なぐり合ひを始める。仲裁に入ると、その仲裁に入つた者まで撲り飛ばして、傷を負はせるといふ有様なので、後には誰も相手に為る者が無くなつて了つた。で、この親と子の間に少なからざる活闘が演じられたが、重右衛門は体格が大きく、馬鹿力があつて、其上意地が非常に強く、酒を飲むと殆ど親子の見さかひも無くなつて了ふものだから、流石さすがの親達も終つひには呆れ返つてこんな子息むすこの傍には居られぬ、と一年許ばかりして、又長野へ出て行つた。

これからが重右衛門の罪惡史である。祖父は歿なくなる、親は追出す、もう誰一人その我儘わがまを抑とめるものが無くなつたので、初めの中は自分の家の財産を抵当に、彼方あつち此方こつちから金を工面して、猶なほその放蕩はうたうを続けて居た。けれど重右衛門とて、丸きり意識を失つた馬鹿者でも無いから、満更その自分の一生に就いて思慮つひを費やさぬ事も無いので、時にはいろ／＼その将来の事を苦にして、自分の家の没落をも何うかして恢くわい復ふくしたいと思つた事もあつたらしい。其証拠には、それから、大凡およそ一年ばかり経つと、丸で人間が變つたかと思はれるやうに、もうふつ／＼りと女郎買をやめて、小作人まかせに荒れて居た田地を耕し、人のために馬を曳ひいて賃金を取り、養蚕やうさんの手伝をして日当を稼ぐなど、それは村の

人が一時眼を聳そばだてる程の勤勉なる労働者と為つた

其頃である。稍やゝその信用が恢復しようとした頃である。村に世話好の男があつて、重右衛門も此頃では余程身持も修をさまつて来たやうだし、あゝ勤勉に労働する処を見ると、将来にも左程希望が無いとも云へぬ。一つ相応な嫁を周旋して、一層身が堅まるやうに為して遣らうではないかといふ者があつたが、それに賛成する者も随分あつて、彼れかこれかといよく相応の嫁を探して遣る事と為つた。

其候補者には誰が為つたらう。

その頃、村の尽頭はづれに老婆と一緒に駄菓子の見世みせを出して、子供等を相手に、亀の子焼などを商あきなつて、辛うじて其日の生活を立て

て行く女があつた。生れは何でも越後の者だといふ事だが、其処に住んだのは、七八年前の事で、始めはその父親らしい腰の曲つた顔の燻つた汚らしい爺様も居つた相だが、それは間もなく死んで、今では母の老婆と二人暮し。村の若い者などが時々遊びに行く事があつても、不器量で、無愛想で、おまけに口が少し訥と来て居るから、誰も物好に手を出すものもなく、二十五歳の今日まで、男といふものは猫より外に抱いた事も無かつた。けれど其性質は悪くはない相で、子供などには中々優しくする様子であるから、何うだ、重右衛門、姿色よりも心と言ふ譬もある、あれを貰ふ気は無いかと勧めた。

重右衛門も流石に二の足を踏んだに相違ないが、余りに人から

執念しふねく勧めらるゝので、それでは何うか好いやうにして下され、私等は、ハア、どうせ不具かたはもの者でござすでと言つて承知して、それより一月ならざるに、重右衛門の寂さびしい家宅いへにはをりくゝ女の笑ふ声が聞える様になつた。

村の人はこれで重右衛門の身が堅まつたと思つて喜んだのである。けれどそれは少くとも重右衛門のやうな性格と重右衛門のやうな先天的不備なところがある人間には間違つた皮相な觀察であつた。一体重右衛門といふ男は負け嫌ひの、横着の、凶々しいところがあつて、そして其上はげに烈しいく熱情を有もつて居る。で、この熱情が旨うまく用ひられると、中々大した事業をも為るし、人の眼を驚かす程の偉功をも建てる事が出来るのだけれど、惜しい事

には、この男にはこれを行ふ力が欠けて居る。先天的に欠けて居る。この男には「自分は不具者かたはもの、自分は普通の人間と肩を並べることが出来ぬ不具もの」といふ考が、小児こどもの中からその頭脳に浸しみ込んで居て、何かすぐれた事でも為ようと思ふと、直ぐその悲しむべき考が脳を衝ついて上つて来る。そしてこの不具者といふ消極的思想が言ふべからざる不快の念をその熱情の唯中に、丁度氷でもあるかのやうに、極めて烈つらしく打込んで行く。この不快の念、これが起るほど、かれには辛いつらことはなく、又これが起るほど、かれには忌いま々くしい事はない。何故なぜ自分は不具に生れたか、何故自分は他の人と同じ天分を受ける事が出来なかつたか。

親が憎い、己おれを不具に生み付けた親が憎い。となると、自分の

全身には殆ど^{ほとん}火焰^{くわえん}を帯びた不動尊も畜^{たゞ}ならざる、憎悪^{ぞうを}、怨恨^{えんこん}、嫉妬^{しつと}などの徹骨の苦々しい情が、寸時もじつとして居られぬほどに簇^{むら}つて来て、口惜^{くや}しくつてく、忌^{いま}々しくつてく、出来るものならば、この天地を引裂^{ひつ}いて、この世の中を闇にして、それで、自分も真逆^{まつさか}様にその暗い深い穴の中に落ちて行つたなら、何^どんなに心地が快^いいだらうといふやうな浅ましい心が起る。

かういふ時には、譬^{たと}へ一銭の銅貨を持つて居らないでも、酒を飲まなければ、何うしても腹の中の虫が承知しない。仕方が無いから、居酒屋に飛んで行つて一杯飲む、二杯飲む。あとは一升、二升。

重右衛門の爲めには、女房が出来たのは余り好い事では無かつ

たが、もし二人の間に早く子供が生れたなら、或は重右衛門のこの腹の虫を全く医いし得たかも知れぬ。けれど不幸にも一年の間に子をつくることが出来なかつた二人の仲は、次第に殺さつ伐ばつに為なり、乱暴に為り、無遠慮になつて、そして、その場合あげくには、泣声、尖とがりこゑを出しての大立廻。それも度重なつては、犬の喧嘩と振向いて見るものなく、女房の顔には殆ど生傷なまきずが絶えぬといふやうな寧ろむし浅ましい境遇に陥つて行つた。

その結果として、折角身持をさまが治り懸けた重右衛門が再び遊廓に足を踏み入れるやうに為り、少しく手を下し始めた荒廢した田地の開墾が全く委棄みきせられて了つたのも、これも余儀ない次第であらう。

も
し、この危機に処して、一家の女房たるものが、少しく伶俐れいりであつたならば、狂瀾きやうらんを既に倒るゝひるがへに翻し、危難を未だ来らざるに拒ふせぐは、さして難い事では無いのである。が、天は不幸なるこの重右衛門にこの纒わづかなる恩恵めぐみをすら惜んで与へなかつたので、尋常よりも尚なほ数等愚劣なるかれの妻は、この危機に際して、あらう事か、不貞腐ふてくされにも、夫の留守を幸ひに、山に住む獵師れふしのあらくれ男と密通した。

そして、その露顕した時、

「だつて、その位くれゐあたは当り前めへだ。お前さアばか、勝手な真似して、
己うらら尤とがめられる積せきはねえだ」

とほざいた。

重右衛門は怒つたの、怒らないのツて、

「何だ、この女あま！」

と一喝して、いきなり、その髪を執とつて、引摺倒ひきずりたふし、拳こぶしの痛くなるほど、滅茶苦茶なぐに撲なぐつた。そして半死半生になつた女房を尻目にかけて、其儘湯田中そのままへと飛んで行つた。そして、酒……酒……酒。

で、これからと言ふものは、重右衛門は全く身を持崩して了つたので、女郎買すを為るばかりではない、悪い山の獵師と墾意なに為つて、賭博ばくちを打つ、喧嘩なやみを為る、茶屋女を買またふ、瞬またく間にその残つて居る田地ことをも悉く人手に渡して、猶なほ其上に宅地と家屋敷を抵当はうたうひに、放蕩費はうたうひを借りようとして居るのだが、誰もあんな無法者

に金を貸して、抵当として家屋敷を押へた処が、跡で何んな苦情を持出さぬものでもない、恐毛振つて相手に為ぬので、そればかりは猶其後少時、かれの所有権ある不動産として残つて居た。

ある時かういふ奇談がある。

かれはその三日前ばかりから、湯田中に流連して、いつもの馴染を^{なしみ}買つて居たが、さて帰らうとして、それに払ふべき金が無い。仕方が無いから、苦情やら忌味^{いやみ}やらを言はれ、三里の山道を^{ぎふ}妓夫を引張つて遣つて来て見ると家の道具はもう大方持出して叩き売つて仕舞つたので、これと言つて金目なものは一つも無い。妓夫は怒るし、仕末に困つて、何うしようと思つて居ると、裏の馬小屋で、主人が居ないので、三日間食はずに、腹を減^{へら}して

居つた、栗毛の三歳が、物音を聞き付けて、一声高く嘶いた。

「やア、まだ馬が居るア」

と言つて、平気でそれを曳出して、飯をも与へずに、妓夫に渡した。そして、彼はその馬を売つた残りの金を費ふべく、再び湯田中へと飛び出して行つたのである。

其事が誰言ふとなく村の者に伝つて、孫（祖父の口癖に言つた）が馬を引張つて来て、又馬を引張つて行かれたとよと大評判の種となつた。

それから、三年。かれが到頭家屋敷を抵当に取られて、忌々しさの余に、その家に火を放ち、露頭して長野の監獄に捕へらるゝ迄其間の行為は、多くは暗黒と罪悪とばかりで、少しも改

善の面影おもかげを顕あらはさなかつたが、只一度……只一度次のやうな事があつた。

それは何でも其家屋の抵当に入つてから後の事だ相だが、ある日かれは金を借ようと思つて、上塩山かみしほやまの上尾貞七あげをの家を訪ねた事があつた。この上尾貞七と謂ふのは、根本三之助などと同じく、一時は非常に逆境に沈淪ちんりんして、村には殆ど身を措く事が出来ぬ程に為つた事のある男で、それから憤いきどほりを発して、江戸へ出て、廿年の間に、何う世の荒波を泳いだか、一万円近くの資産を作つて歸つて来て、今では上塩山第一の富豪かねもちと立てられる身分である。重右衛門が訪ねると、快く面会して、その用向の程を聞き、言ふがまゝに十五円ばかりの金を貸し、さて真面目な声で、貞七が、

「実はお前さんの事は、兼ねて噂うはさに聞いて知つて居つたが、生れた村といふものは、まことに狭いもので、とても其処に居ては、思ふやうな事は出来ない。私なども……覚えが有るが、村の人々に一度信用せられぬとなると、もう何んなに藻搔もがいても、とても其村では何うする事も出来なくなる。お前さんも随分村では悪い者のやうに言はれるが、何うだね、一奮発する気は無いか」

重右衛門は黙つて居る。

「私なども……それア、随分酷ひどい眼に逢あつた。親には見放される、兄弟には唾つばを吐き懸けられる、村の人にはてんから相手にされぬといふ始末で、夜逃の様にして村を出て行つたが、其時の悲しかつた事は今でも忘れない。あの倉沢の先の吹ふき上あげの水の出で居る

処があるが、あそこで、石に腰を懸けて、もうこれで村に帰つて来るか何うだかと思つた時は、情なくなつて涙が出て、いつそこゝで死んで了はうかとすら思つた程であつた。けれど……思返して、何うせ死ぬ位なら、江戸に行つて死ぬのも同じだ、死んだ積りで、量見を入れかへて、働いて見よう……とてく……と歩き出したが、それが私の運の開け始めで、それでまア、兎とに角かく今の身分に為つた……」

「私なんざア、駄目でごす……」

と重右衛門は言つたが、其顔はおのづから垂れて、眼からは大きな涙がほろ／＼と膝の上に落ちた。

「駄目な事があるものか。私などもお前さんの様に、其時は駄目

だと思つた。けれどその駄目が今日のやうな身分になる始となつたぢやがアせんか。何でも人間は氣を大きくしなければ好けない」
答の無いのに再び言葉を續いで、

「村の奴などは何とでも勝手に言はせて置くが好い。世の中は広いのだから、何も村に居なければならねえと言ふのでもねえ、男と生れたからにや、東京にでも出て一旗挙げて来る様で無けりや、話にも何にも為らねえと言ふ者だ……」

重右衛門は殆ど情に堪へないといふ風で潮の如く漲つて来る涙を辛うじて下唇を咬みつゝ押へて居た。

「本当でございすよ、私は決して自分に覚えの無え事を言ふんぢやねえんだから、……本当に一つ奮発さつしやれ、屹度それや立身

するに極つてゐるから」

「私は駄目です……」と涙の込み上げて来るのを押へて、「私ア、とても貴郎あんたの真似は出来ねえです。一体、もうこんな体格からだでございすだで」

「そんな事はあるものか」と貞七は口では言つたが、成程それで十分に奮発する事も出来ないのかと思ふと、一層同情の念が加はつて、愈いよ慰藉あしやして遣らずには居られなくなつた。

「本当にそんな事は無い。世の中にはお前さんなどよりも数等利きかぬ体で、立派な事業を為した人はいくらもある。盲目めくらで学者になつた塙はな検けん校げうと言ふ人も居るし、跛足びつこで大金持に為つた大おほ俣またの惣七といふ男もある。お前さんの体位で、そんな弱い事を言つ

て居ては仕方がない。本当に一つ……遣つて見さつしやる気は無
えかね。私ア、東京にも随分知つてる人も居るだて、一生懸命に
為る積なら、いくらも世話は為て遣るだが」

「難^{ありがた}有い、さう仰つて下さる人は、貴郎ばかり。決して……決

して」と重右衛門は言葉を涙につかへさせながら、「決して忘れ
ない、この御厚恩は！ けれど私ア、駄目です。体格^{からだ}さへかう
でなければ、今までこんなにして村にまごくして居るんぢや御^ご
座^アせんが……。私は駄目です……」

と又涙をほろ／＼と落した。

これは貞七の後での話だが實際その時は気の毒に為つて、あんな
弱い憐れむべき者を村では何故^{なぜ}あのやうに虐待するのであらう。

元はと言へば氣ばかり有つて、体が自由にならぬから、それで彼^あ様な自暴^ん自棄^やな真似^けを為^するのであるのに……と心から同情を表さ^{へう}ずには居られなかつたといふ事だ。實際、重右衛門だとして、人間だから、今のやうな乱暴を働いても、元はその位のやさしい処があつたかも知れない。けれどその体の先天的不備がその根本の悪の幾分を形造つたと共に、その性質も亦その罪惡の上に大なる影響を与へたに相違ないと、自分は友の話を聞きながら、つくづく心の中に思つた。

*

*

*

此後の重右衛門の歴史は只々驚くべき罪惡ばかり、抵当に取られた自分の家が残念だとして、火を放つて、獄に投ぜられ、六年経つて出て来たが、村の人の幾らか好くなつたらうと望を属して居たのにも拘らず、相變らず無頼で、放蕩で後悔を為るところか一層大胆に悪事を行つて、殆ど傍若無人といふ有様であつた。其翌年、賭博現行犯で長野へ引かれ、一年ほどまた臭い飯を食ふ事になつたが、二度目に歸つて来た時は、もう村でも何うする事も出来ない程の悪漢に成り済して、家も無いものだから今の堤下てしたに乞食の住むやうな小屋を造つて、其処に氣の合つた悪党ばかり寄せ集め、米が無くなると、何処の家にもお構ひなしに、一升米を貸して呉れ、二升米を貸して呉れと、平氣な面つらして貰ひ

に行く。そして、少しでも厭な素振を見せると、それなら考があるから呉れなくても好いと威嚇おどすのが習ならひ。村方では又火でも放つけられては……と思ふから、仕方なしに、言ふまゝに呉れて遣る。すると好気いゝきに為つて、幅はゞで、大風呂敷を携たづへて貰つて歩くといふ始末。殆ど村でも持余した。それがまだ其中は好かつたが、ある時ふと其感情を損そこねてからと言ふものは、重右衛門 大童おほわらはになつて怒つて、「何だ、この重右衛門一人、村で養つて行けぬと謂いふのか。そんな吝けちくさい村だら、片端から焼払つて了へ」と酔客の如く大声で怒鳴つて歩いた。

で、今回の放火騒動ひつけさわぎ。

九

山県の家が全焼したあくる日は、益々警戒に警戒を加へて、重右衛門の行為は勿論、もちろんその娘ツ子の一挙一動、何処どこに行つた、かしこ彼処に行つたといふ事まで少しも注意を怠らなかつた。否、消防の人数を加へ、夜番の若者を増して、十五分毎には柝ひやうしぎ木と忍びとが代る／＼必ず廻つて歩くといふ、これならば何んな天魔でも容易に手を下す事が出来まいと思はれる許ばかりの警戒を加へて居て、それは中々一通の警戒ではないのであつた。であるのに、その厳しい防禦線ぼうぎよせんの間を何う巧たくみに潜つてか、其夜の十時少し過ぎと云ふに、何か変な臭ひがすると思ふ間もなく、ふすくと怪し

い音がするので、まだ今寝たばかりの雨戸を繰つて見ると、これはそも驚くまじき事か、火の粉こが降るやうに満面に吹き附けて、すぐ下の家屋の窓からは、黒く黄きいろい烟けむと赤い長い火の影とが……
「火事だア、火事だア」

とこの世も終りと云はぬばかりの絶望の叫喚さけびが凄すさましく聞えた。

自分は慌あわてて、跣足はだしで庭に飛び出した。下の家とは僅わづか十間位

しか離れて居らぬので、母屋おもやでは既に大騒を遣つて居る様子で、

やれ水を運べの桶をけを持つて来いのと老主人が声を限りに指揮さしづする

氣勢けはひが分はつきり明と手に取るやうに聞える。自分もこの危急の場合に

際して、何か手助になる事も思つて、兎とに角母屋かくの方に廻つて

見たが、元より不知案内の身の、何う為る事も出来ぬので、寧むしろ

足あして手まと纏まとひに為らぬ方が得策と、其そのまゝ儘土蔵の前の明地あきちに引返して、只ただ々々その成行を傍觀して居た。

昨夜と均ひとしく、月は水の如く、大空に漂つて、山の影はくつきりと黒く、五六歩前の叢くさむらにはまだ虫の鳴く音が我は顔に聞えて居る。その寂しづかな村落にもくくと黒く黄きいろい烟けむが立昇つて、ばち／＼と木材の燃え出す音！ 続いて、寺の鐘、半鐘の乱打、人の叫ぶ声、人の走る足音！

村はやがて鼎かなへの沸わくやうに騒ぎ出した。

母屋おもやの大広間で恐しく鋭いとがりごゑ尖とがり声こゑが為たと思ふと、

「何だと……何と吐ぬかした？ この藤田重右衛門に……」

と叫んだ者がある。

自分の傍に来て居た友は、

「重右衛門が来て居る！ 自分で火を点つけて置いて、それで知らん顔で、手伝酒を食くらつてるとは凶太いにも程がある」

と言つた。

火は幸さいはひにも根本の母屋には移らずに下の小さい家屋いへ一軒で、兎に角首尾よく鎮火したので、手伝ひに来て呉れた村の人々、唧筒ポンプの水にぬ濡れになつた村の若者、それから遠くから聞き付けて見舞に来て呉れた縁者などを引留めて、村に慣しきたり例の手伝酒を振舞

つて居るところであるが、その十五畳の大広間には順序次第もな
く、荒くれた男がずらりと並んで、親椀で酒を蒙かぶつて居るものも
あれば、茶碗でぐびぐび遺つて居る者もある。さうかと思ふと、
さもく腹はらが空すいて仕方が無いと言はぬばかりに一生懸命に飯を
茶漬にして掻込んで居るもの、胡坐あぐらを掻いて烟草たばこをすぱりく遺
つて御座るもの、自分は今少し前、一寸ちよつと其席を覗のぞいて見たが、
それはく何とも形容する事の出来ぬばかりの殺風景で、何だか
鬼共の集り合つた席では無いかと疑はれるのであつた。いづれも
火の母屋おもやに移らぬ事を祝しては居るが、連夜の騒動に、夜は大分
眠らぬ疲労つかれと、烈しく激昂げきかうした一種の殺氣とが加はつて、何どの
顔を見ても、不穩な落付かぬ凄すこい色を帯びて居らぬものは、一人

も無かつた。

それが、自分が覗のぞいてから、大方一時間にもなるのであるから、酒も次第にその一座に廻つたと覺しく、恐ろしく騒ぐけはひ氣勢が其次の間に満ち渡つた。

「来てるのかね？」

と自分は友の言葉を聞いて、すぐ訊たづねた。

「来てるですとも……奴ア、これが樂みで、この手伝酒を飲むのが半分目的で火をつけるのですア」

暫くすると、

「何だと、この重右衛門が何うしたと……この重右衛門が……」

といふ恐ろしく尖とがつた叫声が、その次の大広間から聞える。

「先生……また酔つたナ」

と友は言つた。

次の間で争ふ声！

「何なに、貴様が火を放つけると言つたんぢやねえ。貴様が火を放つけようと、放つけまいと、それにやちやんと、政府おかみといふものがある。貴様も一度は、これで政府おかみの厄介に為つた事が有るぢやねえか」

かう言つたのは錆さびのある太い声である。

「何だと、……己おれが政府おかみの厄介に為らうが為るまいが、何も奴等うぬらの知つた事つちや無ねえだ。何が……この村の奴等……（少時途絶しばしえて）この藤田重右衛門に手向むかひするものは一人もあるめい。かう見えても、この藤田重右衛門は……」

と腕でも捲まくつたらしい。

「何も貴様が豪えらくねえと言ひやしねえだ、貴様のやうな豪い奴が、この村に居るから困るつて言ふんだ」

「何が困る……困るのは当り前だ。己がナ、この藤田重右衛門がナ、態わざ々困るやうにして遣るんだ」

非常に酔つて居るものと見える。

「酔よつ客ばらひを相手にしたつて、仕方が無えから、よさつせい」

と留める声がする。

暫時しばし沈だんまり黙。

「だが、重右衛門ナア、貴様も此村で生れた人間ぢや無えか、それだに、此こんな様に皆みんな々に爪つま弾はじきされて……悪い事べい為て居て、

それで寢覚ねぞめが好いだか」

と言つたのは、前のと違つた、稍やう老人らしい口吻くちぶり。

「勝手に爪つまはじき弾ひしやアがれ、この重右衛門様はナ、奴等うぬらのやう

なものに相手に為なれねえでも……ねつから困まどらねえだア……べら

棒ぼうめ、根本三之助などと威張いばりやアがつて元ア、賽銭箱さいせんばこから一

文二文盗みやがつたぢやねえだか」

「撲なぐつて了しまへ」

と傍かたはらから憤怒ふんぬに堪へぬといふやうな血氣けつぎの若者わかしよの叫喚さけびが聞えた。

「撲なぐれ！ 撲なぐれ！」

「取と占つちめて了しまへ」

と彼方あつちこつち此方こつちから声が懸る。

「何だ、撲なぐれ？ と。こいつは面白れえだ。この重右衛門を撲るものがあるなら撲つて見ろ！」

と言ふと、ばら／＼と人が撲うちに蒐かつた様な氣勢けはひが為たので、自分は友の留めるのを振り解ほどいて、急いで次の間の、少し戸の明いて居る処へ行つて、そつと覗いた。いづれも其方そつちにのみ氣を取られて居るから、自分の其処に行つたのに誰も氣の付く者は無い。自分の眼には先烟まげむりの籠こもつた、厭いやに蒸熱むしあつい空氣を透とほして、薄暗い古風な大洋燈おほらんぷの下に、一場の凄すさまじい光景まぼろしが幻影まぼろしの如く映つたので、中央の柱の傍に座を占めて居る一人の中老漢ちゆうおやぢに、今しも三人の若者が眼を瞋いからし、拳こぶしを固めて、勢猛いきまゝに打つて蒐からうとして居るのを、傍の老人が頻しきりにこれを遮さへぎつて居るところであ

つた。この中老漢、身には殆ど断きれ々／＼になつた白地の浴衣ゆかたを着、髪を蓬おどろのやうに振乱し、恐しい毛臍けずねを頓着せずあらに露あらはして居るが、これが則すなはち自分の始めて見た藤田重右衛門で、その眼を瞋いからした赤い顔には、まことに凄じい罪惡と自暴自棄との影が宿つて、其半生の悲惨なる歴史の跡が、一々その陰險な皺しわの中に織り込まれて居るやうに思はれる。自分は平生へいぜい誰でも顔の中に其人の生しやう涯がいが顛あらはれて見えると信じて居る一人で、悲惨な歴史の織り込まれた顔を見る程心を動かす事は無いのであるが、自分はこの重右衛門の顔ほど悲惨極まる顔を見た事は無いとすぐ思つた。稍老やいた顔の肉は太いたく落ちて、鋭い眼の光の中に無限の悲しい影を宿しながら、じつと今打ちに蒐からうとした若者の顔を睨にらんだ形状かたちは、丸で

餓^うゑた獣の人に飛^{とび}菟^からうと氣構へて居るのと少しも變つた所は無^ない。

「酔^{よつ}ばらひ客^{りひ}を相手にしたつて仕方が無^なえだ！ 廃^よさつせい、廃^よさつせい！」

と老人は若者を抑へた。

「撲^{なぐ}るとは、面^{おも}白^{しれ}いだ、この藤田重右衛門を撲れるなら、撲つて見ろ、奴^{うぬ}等のやうな青二才とは」

と果して腕を捲^{まく}つて、体をくるりと其方へ回した。

「管^{かま}はんで置くと、好^ない氣に為^なるだア。此奴の為めに、村中大騒を遣つて、夜も碌^{ろく}々寝られねえに、酒を食^{くら}はせて、勝手な事を言はせて置^ねくつて言ふ法は無^なえだ。駐在所で意氣地が無^なくつて、

何うする事も出来ねえけりや、村で成敗せいばいするより仕方が無えだ。
 爺とつさん退どかつせい、放はなさつせい」と二十一二の体の肥つた、血氣
 の若者は、取られた袂たもとを振放つて、いきなり、重右衛門の横よこ面つら
 を烈しく撲つた。

「此奴こいつ！」

と言つて、重右衛門は立上つたが、其儘そのまゝその若者に武者振り
 付いた。若者は何のと金剛力を出したが、流石さすがは若者の元氣に忽た
 ちまち地重右衛門は組伏せられ、火のごとき鉄拳てつけんは霰あられとばかりその
 面上頭上に落下するのであつた。

見兼ねて、老人が五六人寄つて来て、兎に角この組討は引分け
 られたが、重右衛門は鉄拳を食ひし身の、いつかなこの仲裁を承

知せず、よろ／＼と身体からだをよろめかしながら、猶其相手なほに喰つて蒐からうとするので、相手の若者は一先其儘次ひとまづの間へと追遣られた。

「おい、人を撲なぐらせて、相手を引込ませるつて言ふ法は何所どこにあるだ。おい、こら、相手を出せ、出さねえだか」

と重右衛門は烈しく咆哮ほうかうした。

今出すから、まア一先坐ひとまづんなさいと和なだめられて、兎に角再び席に就ついたが、前の酒を一息あふに仰つて、

「おい、出さねいだか」

と又叫んだ。

相手に為するものが無いので、少時頭しばしを低たれて黙つて居たが、ふ

と思出したやうに、

「おい出さんか。根本三之助！ 三之助は居ないか」

と云つて、更に又、

「酒だ！ 酒だ！ 酒を出せ」

と大声で怒鳴どなつた。

云ふが儘に、酒が運んで来られたので、今撲なぐられた憤怒いかりは殆

ど全く忘れたやうに、余念なく酒を湯呑茶碗で仰あふり始めた。かう

なつて、構はずに置いては、始末にいけぬと誰も知つて居るので、

世話役の一人が立上つて、

「重右衛門！ もう沢たくさん山だから帰らうではねえか、余り飲んで

は体に毒だアで……」

と其傍に行つた。

「体に毒だと……」首をぐたりとして、「体に毒だアでと、あんでも好いだ。帰るなら奴等うぬら帰れ。この藤田重右衛門は、これから、根本三之助と」

舌ももう廻らぬ様子。

「まア、話ア話で、後で沢山云ふが好いだ。こんなに意気地なく酔つて居ながら、帰らねえとは、余り押が強過ぎるぢやねえだか」

と世話役は、其儘両手を引張つて、強しひてこの酔漢を立上らせようとした。けれど大磐石だいはんじやくの如く腰を据すゑた儘、更に体を動かさうとも為ないので、仕方がなく、傍の二三人に助勢ひきずりあさせて、無理遣りに其席から引摺上げた。

「何為やがる」

と重右衛門は引摺られながら、後の男を蹴らうと為た。が、夥しく酔つて居るので、足の力に緊りが無く、却つて自分が膳や椀の上に地響してと倒れた。

「おい、確りしろ」

と世話役は叫んで、倒れたまゝ愈起きまじとする重右衛門を殆ど五人掛りにて辛くも抱上げ、猶ぐづくに埋窟を云ひ懸くるにも頓着せず、Xの字にその大広間をよろめきながら、遂に戸外へと伴れ出した。

一室は俄かに水を打ったやうに静かになつた。今しも其一座の人の頭脳には、云ひ合さねど、いづれも同じ念が往来して居るの

で、あの重右衛門、あの乱暴な重右衛門さへ居なければ、村はとこしへに平和に、財産、家屋も安全であるのに、あの重右衛門が居るばかりで、この村始まつて無いほどの今度の騒動^{さわぎ}。

いつそ……

と誰も皆思つたと覺しく、一座の人々は皆意味有り氣に眼を見合せた。

あゝこの一瞬！

自分はこの沈黙の一座の中に明かに恐るべく忌むべく悲しむべき一種の暗潮の極めて急速に走りつゝあるのを感じたのである。

一座は再び眼を見合せた。

「それ！」

と大黒柱を後に坐つて居た世話役の一人が、急に顎あごで命令したと思ふと、大戸に近く座を占めた四五人の若者が、何事か非常なる事件でも起つたやうに、ばら／＼と戸外おもてへ一散に飛び出した。

*

*

*

二十分後の光景。

自分は殆ど想像するに堪へぬのである。

諸君は御存じであらう。自分が始めてこの根本家を尋ねた時、妻君しきが頻りに、鋤すき、鍬くは等を洗つて居た田池たねけ——其周囲には河骨かうほね、撫子なでしこなどが美しくその婉しをらしい影を涵ひたして居た纔わづか三尺四方に

過ぎぬ田池の有つた事を。然るに其田池の前には、今一群の人が黒く影をあつめて居て、その傍には根本家と記した高張提燈たかはりぢやうちんが、月が冴々さえ／＼しく満面に照り渡つて居るにも拘はらず、極めておぼろ朧げに立てられてあるが、自分はそれと聞いて、驚いて、其傍にかけつ駆付けて、その悲惨なる光景を見た時は、果して何んな感に撲たれたであらうか。諸君、其三尺四方の溝のやうな田池の中には、先刻大酔して人に扶たすけられて戸外へ出たかの藤田重右衛門が、殆ど池の広さ一杯に、髪を乱みだし、顔を打伏うつぶして、丸で、犬でも死んだやうになつて溺おほれて居るではないか。

「一体何うしたんです」

自分は激して訊たづねた。

「何アに、先生、えらよつぱらつ酔殺よつぱらつたもんだで、遂つひ、陥はまり込んだだ
ア」

と其中の一人が答へた。

「何故なぜ揚げて遣らなかつた！」

と再び自分は問うた。

誰も答へるものが無い。

けれどこれは訊ねる必要があるか。と自分は直ぐ思つたので、

其儘押黙つて、そつとその憐れな死骸に見入つた。月は明らかに
其田池を照して、溺れた人の髪の毛の散乱せるあたりには、微さざなみかな漣

が、きら／＼と美しく其光きらに燦きらめいて居る。一間と離れた後の草く

叢さむらには、鈴虫やら、松虫やらが、この良夜に、言ひ知らず楽し

げなる好音を奏かなでてゐる。人の世にはこんな悲惨な事があるとは、夢にも知らぬらしい山の黒い影！

「あゝ、これが、この重右衛門の最後か」

と再び思つた自分の胸には、何故か形容せられぬ悲しい同情の涙が鎧よろひに立つ矢の蝟毛みまうの如く簇むら々と烈しく強く集つて来た。

で、自分は猶少時なほしばし其池ほとりの畔ほとりを去らなかつた。

十一

「人間は完全に自然を発展すれば、必ずその最後は悲劇に終る。則すなはち自然その者は到底たうてい現世の義理人情に触しよくちやく着やくせずには終ら

ぬ。さすれば自然その者は、遂にこの世に於て不自然と化したのか」

と自分は独語した。

「六千年来の歴史、習慣。これが第二の自然を作るに於て、非常に有力である。社会はこの歴史を有するが為めに、時によく自然を屈服し、よく自然を潤色する。けれど自然は果して六千年の歴史の前に永久とこしへに降伏し終るであらうか」

「或は謂いふかも知れぬ。これ自然の屈伏にあらず、これ自然の改良である。けれど人間は浅薄なる智と、薄弱なる意とを以て、如何いかなるところにまで自然を改良し得たりとするか」

「神あり、理想あり、然れどもこれ皆自然より小なり。主義あり、

空想あり、然れども皆自然より大ならず。何を以てかくいふと問ふ者には、自分は箇人こじんの先天的解剖をすゝめようと思ふ」

少しばらく時考へて後、

「重右衛門の最期さいごもつまりはこれに歸するのではあるまいか。かれは自分の思ふ儘ま、自分の欲する儘、則ち性能の命令通りに一生を渡つて来た。もしかれが、先天的に自我一方の性質を持つて生れて来ず、又先天的にその不具の体格を持つて生れて来なかつたならば、それこそ好く長い間の人生の歴史と習慣とを守り得て、放恣ほうしなる自然の発展を人に示さなくつても済むのであらうが、悲む可べし、かれはこの世に生れながら、この世の歴史習慣と相容るゝ能はざる性格と体とを有もつて居た」

「殊に、かれは自然の発展の最も多かるべき筈はずにして、しかも歴史習慣を太甚はなはだしく重んずる山中の村——この故郷を離るゝ事が出来ぬ運命を有して居た」

と思ふと、自分が東京に居て、山中の村の平和を思ひ、山中の境の自然を慕つたその愚かさが分はつきり明自分の脳あらうに顕はれて来て、山は依然として太古、水は依然として不朽、それに対して、人間は僅わづか六千年の短き間にいかにその自然の面影おもかげを失ひつゝあるかをつく／＼嘆ぜずには居られなかつた。

「けれど………」

と少時しばらくして、

「けれど重右衛門に対する村人の最後の手段、これとて人間の所い

はゆる

謂不正、不徳、進んでは罪惡と称すべきものの中に加へられぬ心地するは、果して何故であらう。自然……これも村人の心底から露骨にあらはれた自然の發展だからではあるまいか」

此時ゆくりなく自分の眼前に、その沈黙した意味深い一座の光景が電光いなづまの如く顕あらはれて消えた。続いて夜の光景、暁の光景、こ
とに、それと聞いて飛んで来た娘つ子の驚愕おどろき。

「爺様とっさん、嘸さぞ無念だつたべい。この仇かたきア、己おらア、屹きつと度取つて遣る
だアから」

と怪しげなる声を放つて、其死体に取り附いて泣いた一場の悲劇
!

其鋭い声が今も猶耳に聞える。

午後になつて、漸くやうや長野から判事、検事、などが、警察官と一緒に遺つて来て臨検したが、その溺死した田池たねけがいかにも狭く小さいので、いかに酔つたからとて、こんな所で独りひとで溺れるといふ訳は無い。これには何か原因があるであらうと、中々事情が難かしくなつて、其時傍に居た二三人は、事に寄ると長野まで出なければならぬかも知れぬといふ有様。それにも拘らず溺死者の死体は外に怪しい箇所ところも無いので、其儘受取人として名告なのつて出たかの娘つ子さげわたに下渡された。

半日水中に浸けてあつたので、顔は水膨れみづぶくに気味悪くふくれ、眼は凄じくすさま一所を見つめ、鼻涙はなは半開なかばいた口に垂れ込み、だらりと大いなる鞆丸きんたまをぶら下げたるその容体ていたらく、自分は思はず両手

に顔を掩おほつたのであつた。

「それにしても、娘あまつ子つはあの死骸を何うしたであらう。村では、あの娘つ子の手に其死骸のある中は、寺には決して葬らせぬと言つて居つたが……」

かう思つて自分は戸外おもてを見た。昨夜の月に似もやらぬ、今日は朝より曇り勝にて、今降り出すか降り出すかと危んで居たが、見ると既に雨になつて、打渡す深緑ことは悉く湿うるほひ、灰色の雲は低く向ひの山の半腹までかゝつて、夏の雨には似つかぬ、しよぼくと烟けふるがごとき糠ぬか雨あめの侘わびしさは譬たとへやうが無い。

其処へ根本が不意に入つて来た。

検死事件で一寸手離されず、彼方あつち此方こつちへと駈走つて居たが、漸やうや

く何うにかなりさうになつたので、ひとまつ先体を休めに歸つて来たとの事であつた。

「何うだね？」

と聞くと、

「何アに、そんな其様に心配した程の事は無えでござす。警官も奴の悪党の事は知つて居るだアで、内々はもつとも道理だと承知してゐるでござすが、其処は職掌で、さう手軽く済ませる訳にも行かぬと見えて、それであんな彼様な事を言つたんですア」

「それで死骸は何うしたね」

「重右衛門のかね。あの娘あまつ子が引取つて行つたけれど、村では誰も構ひ手が無し、遠い親類筋のものは少しはあるが、皆な村を

憚はぶつて、世話を為しようと云ふものが無えので、娘あまつ子非常つに困つて居たといふ事です……。けれど、今途中で聞くと、娘あまつ子奴、一人で、その死骸を背負しよつて、其小屋の裏山にのぼくつて、小屋の根太ねだやら、扉やらを打ぶちこ破はして、火葬くわいじやうにしてるといふ事だが……此処こゝから烟位けむ見えるかも知れねえ」と言つて向ふを見渡した。

注意されて見ると、成程、三峯の下の小高い丘の深緑の上には、ぬかあめ糠雨のおぼつかなきはうふつ髣髴の中に、一道の薄い烟が極めて絶え／＼に靡なびいて居て、それが東から吹く風に西へ西へと吹寄せられて、忽たちまち地雲ぢぐもに交つて了ふ。

「あれが、左様さうです」

と平気で友は教へた。

それが村で持余された重右衛門の亡骸なきがらを焼く烟かと思ふと、自分は無限の悲感に打れて、殆ど涙も零おつるばかりに同情を濺そがずには居られなかつた。「死はいかなる敵をも和睦わぼくさせると言ふではないか。であるのに、死んだ後までも猶なほその死骸を葬るのを拒むとは、何たる情ない心であらう。そのあはれなる自然児をして、小屋の扉を破り、小屋の根太ねだを壊して、その夫の死骸を焼く材料を作らせるとは、何たる悲しい何たる情ない事であらう」

自分の眼の前には、その獣の如き自然児が、涙を揮ふるつて、その死骸を焼いて居る光景が分はつきり明見える。下には村、かれ等二人が敵として戦つた村が横よこたつて居るが、かの娘は果して何んな感を抱

いてこの村を見下して居るであらうか。

「けれど重右衛門の身に取つては、寧ろこの少女の手——宇宙に唯一人の同情者なるこの自然児の手に親しく火葬せらるゝのが何んなに本意であるか知れぬ。否、これに増る導師は恐らく求めても他に在るまい」

「村の人々、無情なる村の人々、死しても猶和睦する事を敢てせぬ程の冷かなる村の人々の心！ この冷かなる心に向つて、重右衛門の霊は何うして和睦せられよう。さればその永久に和睦せられざる村人の寺に穩かに葬られて眠らんよりは、寧ろそのやさしき自然の儘なる少女の手に——」

暗涙が胸も狭しと集つて来た。

「自然児は到底たうていこの濁つた世には容いられぬのである。生れながらにして自然の形を完全に備へ、自然の心を完全に有せる者わざはひは禍なるかな、けれど、この自然児は人間界に生れて、果して何の音もなく、何の業わざもなく、徒いたづらに敗績はいせきして死んで了ふであらうか」

「否、否、否、——」

「敗績して死ぬ！ これは自然児の悲しい運命であるかも知れぬ。けれどこの敗績は恰あたかも武士の戦場に死するが如く、無限の生命を有しては居るまいか、無限の悲壯あらを顕あらはしては居るまいか、この人生に無限の反省を請求しては居るまいか」

自分は深く思ひ入つた。

少しばらく時らくしてから、

「けれど、この自然児！　このあはれむべき自然児の一生も、大いなるものの眼から見れば、皆なその必要を以て生れ、皆なその職分を有して立ち、皆なその必要と職分とのために尽して居るのだ！　葬る人も無く、獣のやうに死んで了つても、それでも重右衛門の一生は徒爾いたづらではない！」

と心に叫んだ。

何時いつ去つたか、傍には既に友は居らぬ。

戸外の雨はいよくわび侘しく、雲霧は愁うれひの影の如くさびしくこの天地に充みち渡つた。丘の上の悲しい煙は、殆ど消ゆるかと思はるゝばかりに微かに、微かに靡なびいて居るが、村ではこれに対して一人も同情する者が無いと思ふと、自分は又簇むらく々と涙を催した。

あゝその雨中の煙！ 自分は何うしてこの光景を忘るゝ事が出
来よう。

十二

否——

諸君、自分は其夜更に驚くべく忘るべからざる光景に接したの
である。自分は自然の力、自然の意のかほどまで強く凄じいもの
であらうとは夢にも思ひ懸けなかつた。其夜自分は早くから臥床
に入つたが、放火の主犯者が死んで了つたといふ考へと、連夜眠
らなかつた疲労つかれとは苦もなく自分を華胥くわしよに誘つて、自分は殆ど

魂たましひ魄ひを失ふばかりに熟睡して了つた。熟睡、熟睡、今少し自分が眼覚めずに居つたなら自分は恐らく全く黒焼に成つたであらう。自分の眼覚めた時には、既に炎々たる火が全室に満ち渡つて、黒煙が一寸先も見えぬ程に這はつて居た。自分は驚いて、慌あわてて、寝ね衣まきの儘、前の雨戸を烈しく蹴つたが、幸さいにも闕きはひの溝しきぬが浅みぞい田舎家ゐなかやの戸は忽たちまちはつ地外ちれて、自分は一いち簇ぞくの黒煙と共に戸外おもてへと押し出された。

押出されて、更に驚いた。

夢では無いかと思つた。

何うです、諸君。全村が丸で火※ 鎮守の森の蔭に一つ。すぐ前の低いところの一隅かたすみに一つ。後に一つ。右に一つ。殆ど五六

ケ所から、すさま凄じい火の手が上つて、それが灰色の雨雲に映つて、
ねぼ寝惚けた眼で見ると、天も地もこと／＼悉く火に包まれて了つたやうに思
はれる。雨はや歇んだ代りに、風が少し出て、そのこくえん黒烟とその火
とが恐ろしい勢で、次第に其領分をひろめて行く。寺の鐘、半鐘、
叫喚、大叫喚※

自分は後の低い山に登つて、種々いろくなる思想にうた撲れながら一人
その悲惨なる光景をなが眺めて居た。

実際自分はさま／＼の経験を為たけれど、この夜の光景ほど
悲壮に、この夜の光景ほど莊嚴に自分の心を動かしたことは一度
も無かつた。火の風つに伴れて家から家に移つて行くいきほひ勢、人のそれ
をか防ぎ難ねて折々発する絶望の叫喚さけび、自分はあのせつな刹邪こそ確かに

自然の姿に接したと思つた。

諸君！ これでこの話は終結をはりである。けれど猶なほ一言、諸君に聞

いて貰はなければならぬ事がある。それは、その翌日、殆ど全村

を焼き尽したその灰くわいじん 燼なかげの中に半焼けた少女の死屍をとめを発見した

事で、少女は顔を手に当てたまゝ、打伏うつぶしに為つて焼け死んで居た。

かれは人に捕へられて、憎悪ぞうをの余あまり、その火の中に投ぜられたので

あらうか、それとも又、独ひとり微笑ほゝゑんで身をその中に投じたのであ

らうか。それは恐らく誰も知るまい。

自分は其翌日万感を抱いてこの修羅しゆらの巷ちまたを去つた。

それからもう七年になる。

其村の人々には自分は今も猶交際して居るが、つい、此間も其

村の冒険者の一人が脱走して自分の家を尋ねて来たから、あの後は村は平和かと聞くと、「いや、もうあんな事は有りはしねえだ。あんな事が度々有つた日には、村は立つて行かねえだ。御方便な事には、あれからはいつも豊年で、今でア、村ア、あの時分より富貴かねもちに為つただ」と言つた。そして重右衛門とその少女との墓が今は寺に建てられて、村の者がをりくかうげ香花を手向けるといふ事を自分に話した。

諸君、自然は竟つひに自然に歸つた！

(明治三十五年五月)

青空文庫情報

底本：「筑摩現代文学大系 6 国木田独歩 田山花袋集」筑摩書房

1978（昭和53）年11月25日初版第1刷発行

1980（昭和55）年2月20日初版第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力者・kompass

校正：伊藤時也

2004年8月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

重右衛門の最後

田山花袋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>